仙台市文化財調査報告書第219集

安久遺跡

――第3次発掘調査報告書――

1997.3

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第219集

安久遺跡

あん　きゅう

――第３次発掘調査報告書――

１９９７．３

仙台市教育委員会

序　　文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、多大なご協力を賜り、まことに感謝に絶えません。

仙台市の南部に位置する西中田地区は、以前、近郊農業地帯として推移して参りました。近年では、市街化が急速に進み、仙台市のベッドタウンとして生まれ変わりつつあります。

安久遺跡の調査もこうした市街化の流れの中で、第３次調査として実施されました。過去に行われた発掘調査では、古墳時代終末期の古墳や古代の集落跡が発見されました。今回の調査ではそれらは検出できませんでしたが、生活の様子を探る手がかりとなる様々な遺物の出土があり、また、平安時代や中・近世の溝跡などが検出され、新たな知見も加わりました。

この報告書が皆様方の歴史研究の一助として広く活用され、文化財に対するご理解と保護に役立ちますことを念じております。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書の刊行に際して、ご協力下さいました皆様に対し、深く感謝申し上げます。

平成９年３月

仙台市教育委員会
教育長　堀　籠　克　彦

例　　言

1．本書は共同住宅建設工事に関わる安久遺跡の発掘調査報告書である。

2．出土遺物の整理と報告書作成は平間亮輔、伊藤孝行が担当し、編集は伊藤が行った。陶器・磁器の鑑定は佐藤洋が行った。なお、本文の執筆分担は第１章、第２章は伊藤、第４章は平間が行ったが、第３章の執筆については古環境研究所に依頼した。

3．発掘調査および報告書作成にあたっては柿沼一夫氏、株式会社大京の協力を受けた。

4．本調査における出土遺物、実測図、写真等の資料は仙台市教育委員会で一括保管している。

凡　　例

1．本書中の土色については「新版標準土色帖」小山、竹原1995を使用した。

2．本書使用の地形図は国土地理院発行５万分の１「仙台」、仙台市都市計画課作成の2.5万分の１「都市計画図」である。

3．本書中の北は真北を示している。

4．遺構の略称としてSD：溝跡、P：ピットを使用した。

5．土師器の黒色処理はスクリーントーンで示した。

6．遺物の法量のうち（　）は図上復元値である。

7．引用・参考文献は巻末にまとめた。

目　　次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査要項……1
　第２節　遺跡の概要……3
　第３節　調査方法……4
　第４節　基本層序……5
第２章　検出された遺構と遺物……8
　第１節　遺構の検出状況と概要……8
　第２節　Ⅳａ層の遺構と遺物（１）……8
　第３節　Ⅳａ層の遺構と遺物（２）……15
　第４節　下層の調査……26
　第５節　その他の出土遺物……28
第３章　プラント・オパール分析……29
第４章　まとめ……31
報告書抄録……56

挿　図　目　次

第１図　遺跡周辺の地形……1
第２図　周辺の遺跡……2
第３図　調査区位置図……3
第４図　調査区設定図……4
第５図　基本層序……5
第６図　遺構全体図……7
第７図　SD１断面図……8
第８図　SD２断面図……8
第９図　Ⅳa層上面全体図（１）……9
第10図　SD１～５平面図……10
第11図　SD４・５断面図……11
第12図　SD６・７・10平面図……12
第13図　SD６・７断面図……13
第14図　SD６出土遺物……13
第15図　SD10断面図……13
第16図　Ⅳa層上面全体図（２）……14
第17図　SD８断面図（１）……15
第18図　SD８平面図……16
第19図　SD８断面図（２）……17
第20図　SB８平面・断面図（東部）……18
第21図　SB８平面・断面図（橋脚部）……19
第22図　SB８出土遺物（１）……20
第23図　SB８出土遺物（２）……21
第24図　SD９平面図……22
第25図　SD９断面図……23
第26図　SD９出土遺物……23
第27図　SD11平面図……24
第28図　SD11断面図……25
第29図　SD11出土遺物……25
第30図　A-３試掘区Ｖa層上面平面図……26
第31図　A-３試掘区断面図……27
第32図　A-３試掘区出土遺物（Ｖc層）……27
第33図　B-４試掘区断面図……28
第34図　その他の出土遺物……28
第35図　遺構変遷図……33
第36図　安久遺跡・安久東遺跡遺構全体図（略図）…35

挿　表　目　次

表１　周辺の遺跡地名表……2
表２　安久遺跡調査次数表……4
表３　安久遺跡のプラント・オパール分析結果……30
表４　破片集計表……32

写真図版目次

〔遺　構〕

写真１　基本層序（１）……39
写真２　基本層序（２）……39
写真３　調査風景……39
写真４　SD１・２確認状況……40
写真５　SD１・２完掘状況……40
写真６　SD１断面……40
写真７　SD３～５完掘状況……41
写真８　SD５完掘状況……41
写真９　SD４・５断面……41
写真10　SD６確認状況……42
写真11　SD６完掘状況……42
写真12　SD７完掘状況……42
写真13　SD７断面……43
写真14　SD10完掘状況……43
写真15　SD８確認状況……43
写真16　SD８堆積土上層の状況……44
写真17　SD８堆積土下層の状況……44
写真18　SD８底面（溝状の窪みの確認状況）……44
写真19　SD８完掘状況……45
写真20　SD８橋脚ピット……45
写真21　SD８橋脚ピット……45
写真22　SD８漆器椀出土状況……45
写真23　SD８出土の河原石……45
写真24　SD８断面［B－B′］……46
写真25　SD８断面［C－C′］……46
写真26　SD９確認状況……46
写真27　SD９完掘状況……47
写真28　SD９断面……47
写真29　SD11確認状況……47
写真30　SD11完掘状況……48
写真31　SD11完掘状況……48
写真32　SD11断面……48
写真33　A－３試掘区Ｖａ層上面検出状況……49
写真34　A－３試掘区Ｖｃ層中遺物出土状況……49
写真35　B－４試掘区Ｖａ層上面検出状況……49

〔遺　物〕

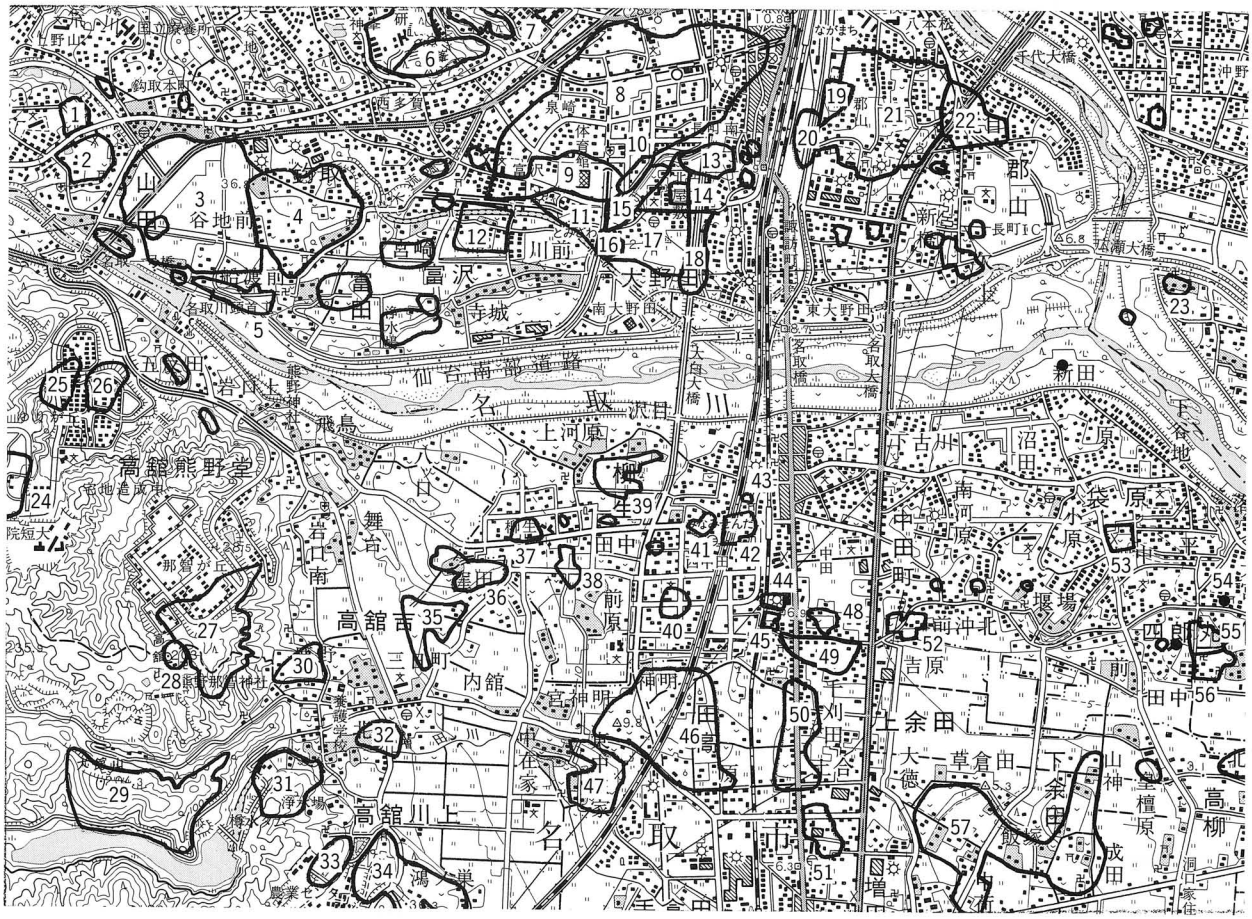
写真36　SD６出土遺物……50
写真37　SD８出土遺物（１）……50
写真38　SD８出土遺物（２）……51
写真39　SD８出土遺物（３）……52
写真40　SD９出土遺物……53
写真41　SD11出土遺物……53
写真42　A－３試掘区Ｖｃ層出土遺物……54
写真43　その他の出土遺物……55

第１章　はじめに

第１節　調査要項

遺　跡　名：安久遺跡（仙台市文化財登録番号 C-140、宮城県遺跡登録番号01106）
調　査　名：安久遺跡第３次発掘調査
所　在　地：仙台市太白区西中田五丁目７番８
調 査 主 体：仙台市教育委員会
調 査 担 当：仙台市教育委員会文化財課調査第二係　　担当職員　平間亮輔　伊藤孝行
調 査 期 間：試掘調査　1995（平成７）年11月８日～11月10日
　　：本調査　　1996（平成８）年７月22日～９月11日
調査対象面積：782㎡
調 査 面 積：707㎡
調 査 協 力：柿沼一夫、株式会社大京
発掘調査参加者：青木　吉次　浅見　禮子　阿部みのる　入間川きみ　伊藤　清子　遠藤いな子
大沼みさほ　小畑　和子　加嶋みえ子　工藤きく子　佐藤とき子　佐野たみえ
庄子　弘子　鈴木　いし　須賀　栄子　菅井　清子　菅井きみ子　菅井美枝子
菅谷　裕子　高橋たづよ　竹森　光子　田中さと子　棕沢　純子　早坂みつえ
福山　幸子　本郷　　正　山田千代子　三浦つよの　渡辺　洋子
整理作業参加者：相沢美佐子　熊谷きぬ子　斎藤喜恵子　佐藤よし子　雫石　良子　高橋　弘子
横山美代子　渡辺まき子

第１図　遺跡周辺の地形



第２図　周辺の遺跡（1/50000）

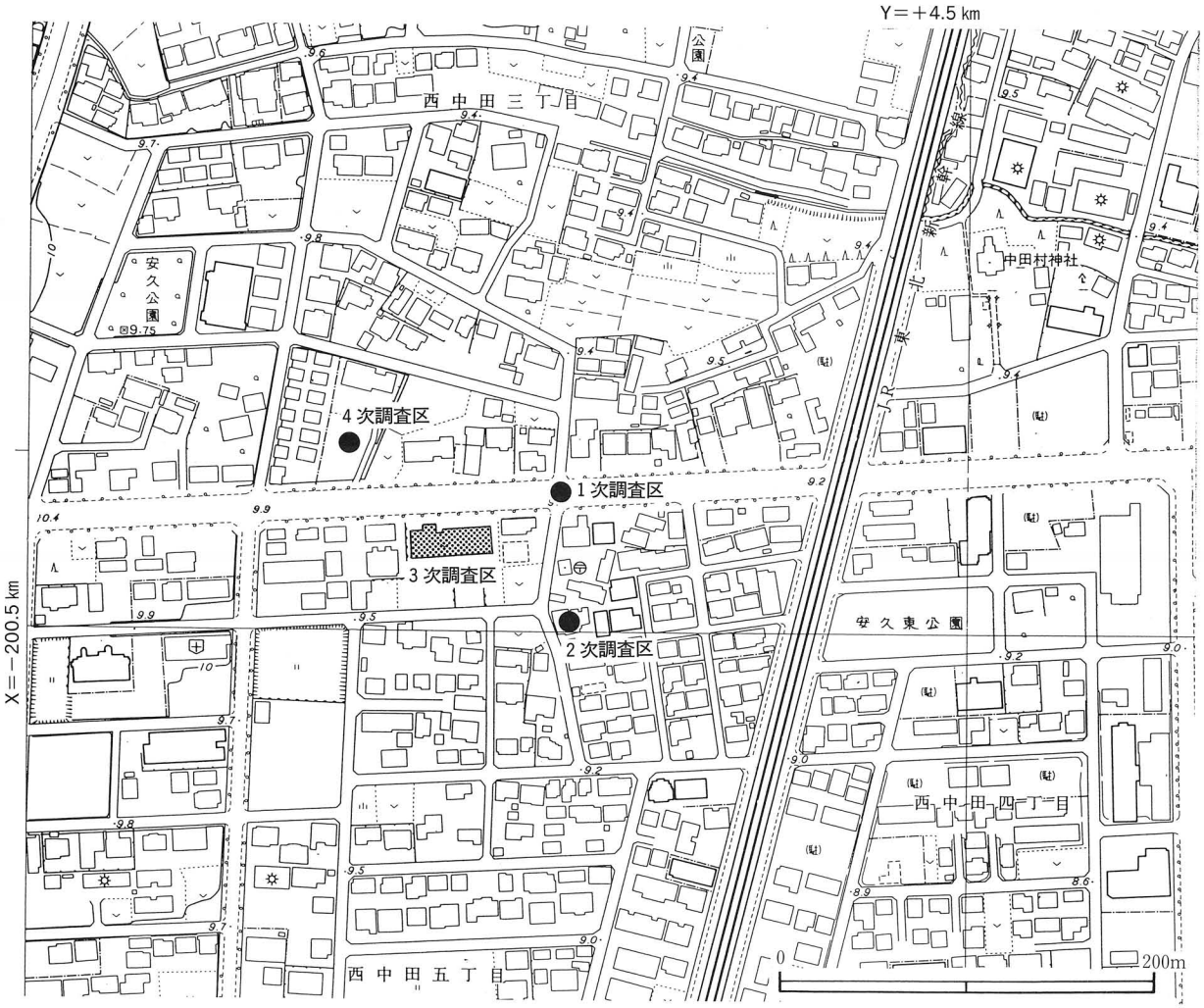
1	北前遺跡	集落跡	段丘	旧石器・縄文・古墳・平安・近世	28	熊野那智神社	神社跡	丘陵中腹	中世・近世
					29	大館山遺跡	城館跡	丘陵	中世
2	山田上ノ台遺跡	集落跡	段丘	旧石器・縄文・平安・近世	30	上町遺跡	包含地	台地	縄文（中）・奈良・平安
3	山田条里遺跡	条里遺構	段丘	縄文・平安・近世	31	桑島館跡	城館跡	丘陵	中世
4	上野遺跡	集落跡	段丘	縄文・奈良～平安	32	川上遺跡	包含地	沖積地	縄文・弥生・奈良～平安
5	船渡前遺跡	包含地	自然堤防	縄文・弥生・平安	33	金剛寺貝塚	貝塚	丘陵	縄文
6	三神峯遺跡	集落跡	段丘	縄文	34	今熊野遺跡	集落跡・貝塚	丘陵	縄文・弥生～平安
7	土手内窯跡	窯跡	丘陵	古墳・奈良	35	高畑遺跡	包含地	沖積地	弥生～平安
8	富沢遺跡	水田跡他	後背湿地	旧石器～近世	36	乗馬遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
9	山口遺跡	集落跡	自然堤防 後背湿地	縄文・弥生・古墳・平安	37	松木遺跡	集落跡	自然堤防	平安～近世
					38	関場遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安
10	下ノ内浦遺跡	包含地	自然堤防	縄文・弥生・奈良・平安	39	柳生台畑遺跡	包含地	自然堤防	古墳・古代
11	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・奈良・平安	40	栗遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～平安
12	富沢館跡	城館跡	自然堤防 後背湿地	中世	41	**安久遺跡**	集落跡	自然堤防 後背湿地	奈良～平安
13	元袋遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安	42	安久東遺跡	集落跡・古墳群	自然堤防	古墳・奈良～平安・中世
14	大野田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文（後期）・弥生	43	中田神社裏遺跡	包含地	自然堤防	古墳・平安
15	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生～平安	44	前田遺跡	館跡	自然堤防	中世
16	伊古田遺跡	包含地	自然堤防	縄文・古墳・奈良・平安	45	壇腰遺跡	包含地	自然堤防	奈良～平安
17	大野田古墳群	古墳群他	自然堤防	古墳～平安	46	清水遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～平安
18	王ノ壇遺跡	古墳・集落跡他	自然堤防	古墳～中世	47	田高遺跡	包含地	自然堤防	弥生～平安
19	西台畑遺跡	包含地	自然堤防	縄文（後期）・弥生・古墳	48	中田北遺跡	包含地	自然堤防	奈良～平安
20	長町駅東遺跡	包含地	自然堤防	弥生・古墳・古代	49	中田南遺跡	集落跡・館跡	自然堤防	奈良～平安
21	郡山遺跡	官衙跡・水田跡他	自然堤防 後背湿地	弥生～奈良	50	上余田遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～平安
					51	沢目遺跡	包含地	自然堤防	古墳～平安
22	北目城跡	城館跡	自然堤防	室町・奈良	52	後河原遺跡	水田跡	自然堤防	奈良～平安
23	日辺館跡	城館跡	沖積地	室町	53	中田畑中遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
24	熊野堂大館跡	城館跡	丘陵	中世	54	城丸（大宮）古墳	円墳	自然堤防	古墳
25	黒崎城跡	城館跡	丘陵	中世	55	戸ノ内遺跡	集落跡・城館跡	自然堤防	古墳・平安・中世
26	小館（古館）跡	城館跡	丘陵	中世	56	四郎丸館跡	周溝墓・集落・城館	自然堤防	古墳・平安・中世・近世
27	高館城跡	城館跡	丘陵	中世	57	下余田遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安

表１　周辺の遺跡地名表

第２節　遺跡の概要

安久遺跡は、ＪＲ南仙台駅の西側、仙台市太白区西中田二丁目と五丁目に位置する。名取川と広瀬川の合流点から約2.5km上流、名取川南岸0.8kmの地点にある。地形的には、名取川の旧河道とそれによって形成された自然堤防と後背湿地が複雑に入り組んだところに立地している。

名取川流域は、宮城県内で最も多くの遺跡があることで知られている。名取川下流域南岸の旧石器時代の遺跡としては、高舘丘陵の台地上に立地する西野田遺跡のみであるが、台地を中心に人々の活動の痕跡が確認される。今後さらにこの時代の遺跡の増加が期待できるであろう。縄文時代の遺跡としては今熊野遺跡がよく知られており、前期の竪穴住居跡が71件も発見されており、大規模な集落が形成されていたことがわかる。弥生時代になると、縄文時代では遺跡の極めて少なかった南岸部の低地にも遺跡が点々と分布している。古墳時代になると遺跡の数が増加し、自然堤防から浜堤まで遺跡の分布が広がり、隣接する安久東遺跡、戸ノ内遺跡、四郎丸館跡などからは前期の竪穴住居跡や方形周溝墓が検出されており、政治的な社会が形成されてきたことを示している。また、７世紀後半になると、陸奥国の設置と同時に名取郡が置かれたものと考えられている。奈良・平安時代になると、清水遺跡や中田南遺跡などで集落の拡大が認められており、本遺跡や、安久東遺跡、中田畑中遺跡などでも集落跡が検出されているなど増加を示している。中世になると、高舘丘陵に山城が、低地には安久東遺跡、前田遺跡、中田南遺跡、



第３図　調査区位置図

四郎丸館跡などの城館、居館が数多く造営される。近世になると、仙台城下町は広瀬川北岸の河岸段丘上を中心に建設され、そのころの名取川下流域は大半が農村地帯となるが、奥州街道の整備に伴い中田に宿場町が作られる。

以上のように、本遺跡周辺地域には旧石器時代から現代に至るまで連綿と人々の生活の痕跡が残されている。

次数	所在地	調査期間	調査面積	調査概要（主な発見遺構）	文献
１次	西中田三丁目・五丁目 （県道岩沼・仙台線）	Ｓ50．２．３～Ｓ50．３．31	約3000㎡	古墳時代終末期の古墳、溝跡 平安時代の竪穴住居跡、土坑	伊東他1975
２次	西中田五丁目６－34	Ｈ４．６．９～Ｈ４．６．10	45㎡	竪穴住居跡	木村　1993
３次	西中田五丁目７－６	Ｈ８．７．22～Ｈ８．９．11	707㎡	古代～近世の溝跡	本書
４次	西中田三丁目２－６	Ｈ８．12．12～Ｈ８．12．18	85㎡	平安時代の竪穴住居跡	竹田　1997

表２　安久遺跡調査次数表

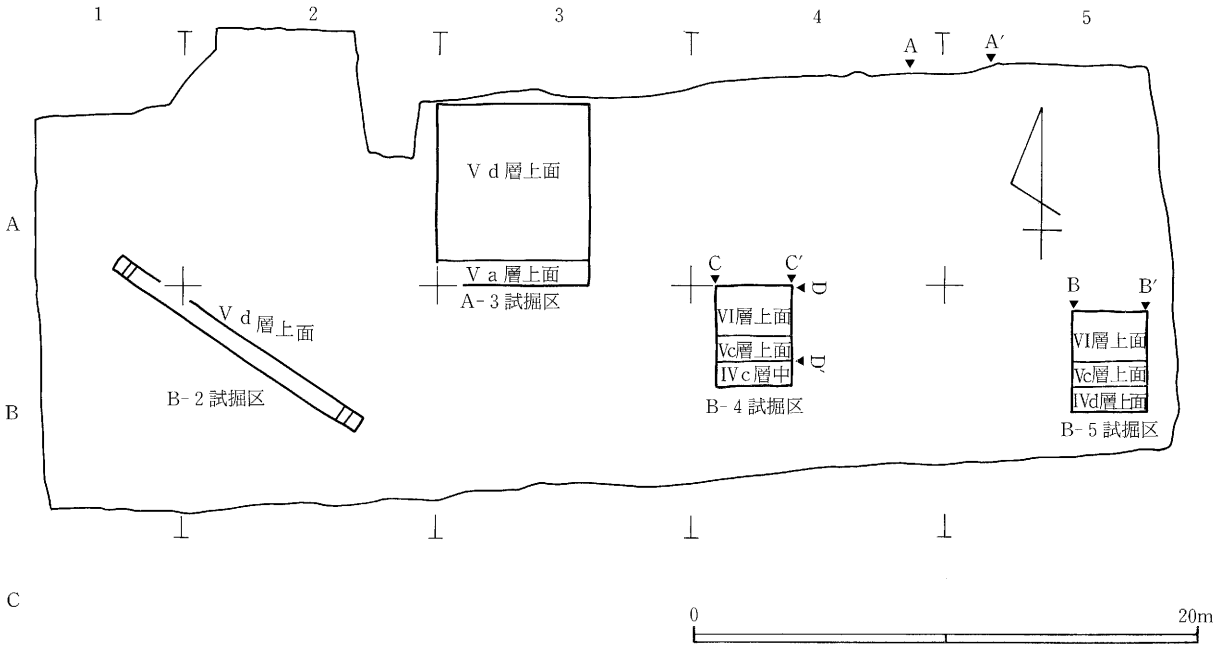
第３節　調査方法

１．調査区の設定

今回の調査地点は安久遺跡範囲のほぼ中央の地点にあり、畑として利用されていた。共同住宅建設によって掘削を受ける782㎡のうち707㎡に調査区を設定した。調査区には、平面直角座標系Ｘに乗せて基準杭を打ち10ｍグリッドを設定した。グリッドの名称は、東西方向をアラビア数字、南北方向をアルファベットとし、両者の組み合わせで表した。また、グリッド交点の名称は、交点の南東側のグリッドの名称で示した。

２．調査方法

調査は、Ⅰ・Ⅱ層を重機で除去し、Ⅲ層上面から精査を行った。Ⅲ層は西端部の一部しか残存せず遺構が検出できなかったため、Ⅳ層上面まで除去し精査を行った。この時点で溝11条、ピット26基を確認した。調査中、遺構の平面図は基準杭によって簡易遣り方を組み、縮尺1/40で作成した。土層断面図・エレベーション図は縮尺1/20を用いた。その後、それよりも古い時期の文化層の確認を行うため４ケ所に試掘区を設け、平面的な調査を行うことにした。



第４図　調査区設定図

第４節　基本層序

基本層序は大別して６層が確認された。Ⅳａ層上面が遺構確認面である。

第Ⅰ層：表土。６層に細分される。Ⅰａ層～Ⅰｃ層は全体に分布し、Ⅰｄ層～Ⅰｆ層は南西部のみに分布、Ⅰｆ層からビニールひもが出土している。

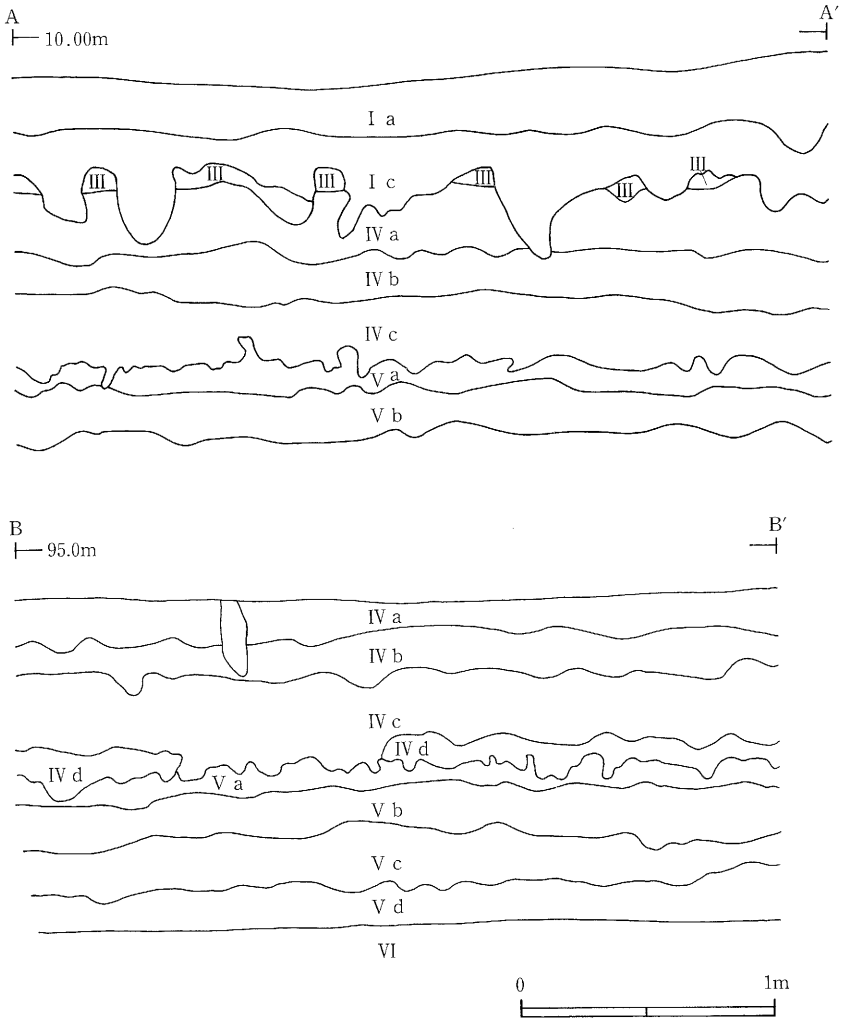
第Ⅱ層：耕作土。西端部のみで確認され、厚さ30cm前後である。10YR4/2 灰黄褐色シルトで、にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを少量含んでいる。

第Ⅲ層：大部分がⅠｃ層の撹拌を受けていて、下部の一部しか存在せず、厚さは平均７cmである。10YR3/1 黒褐色粘土質シルトである。

第Ⅳ層：褐色系の層をⅣ層とし、それを４層に細分した。調査区全てに分布している。

遺構確認面のⅣａ層は、厚さ20～30cmで、10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトで、10YR3/2 黒褐色粘土粒子を微量に含む。

Ⅳｂ層は、厚さ20cm前後で、10YR3/3 暗褐色粘土質シルトで、10YR4/2 灰黄褐色シルトブロックを少量、



第５図　基本層序（地点は第４図参照）

木炭粒を微量含む。

Ⅳｃ層は、厚さ30cm前後で、10YR3/3 暗褐色粘土質シルトで、10YR4/2 灰黄褐色シルトブロックを多量、下部はⅣｄ層あるいはＶａ層ブロックを少量含む。

Ⅳｄ層は、厚さ20cm前後で、10YR4/4 褐色砂質シルトで暗褐色粘土ブロックを少量含む。

Ⅳｃ層とⅣｄ層の下部の凹凸が激しく耕作土の可能性が考えられ、B-５試掘区でⅣ層のプラント・オパール分析のための土壌を採取した。

第Ⅴ層：黒褐色系の層をⅤ層とし、そこから４層に細分した。調査区全てに分布している。

Ｖａ層は、厚さ20cm前後で、10YR3/1 黒褐色粘土で、Ｖｂ層ブロックを少量含み、耕作土の可能性が考えられる。

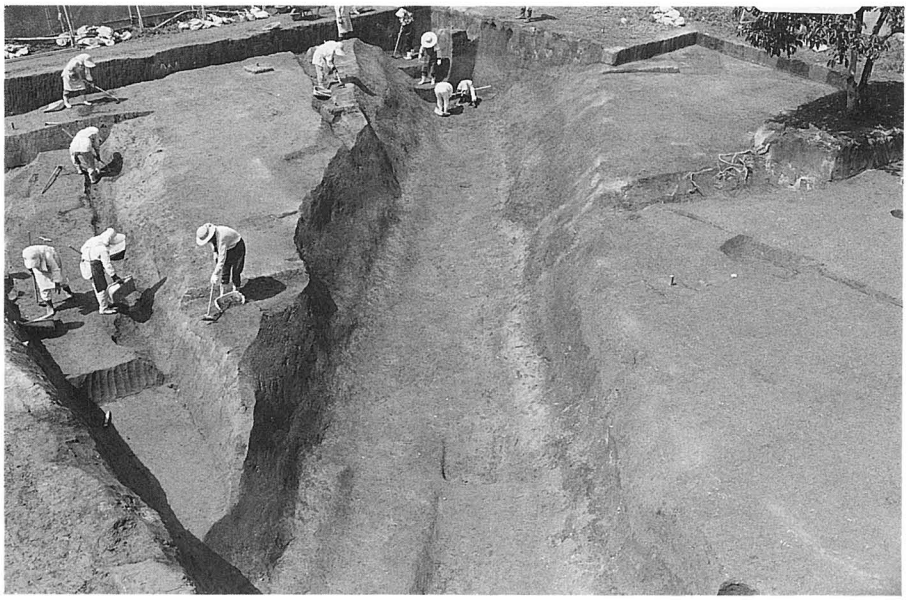
Ｖｂ層は、厚さ平均30cmで、Ｖａ層よりやや薄めの10YR3/2 黒褐色粘土である。B-５試掘区で、磨滅しているため詳しくわからないが、縄文土器が出土している。

Ｖｃ層は、厚さ平均20cmで、10YR3/3 暗褐色粘土で酸化鉄を斑紋状に少量含む。A-３試掘区で縄文土器・石器が出土している。

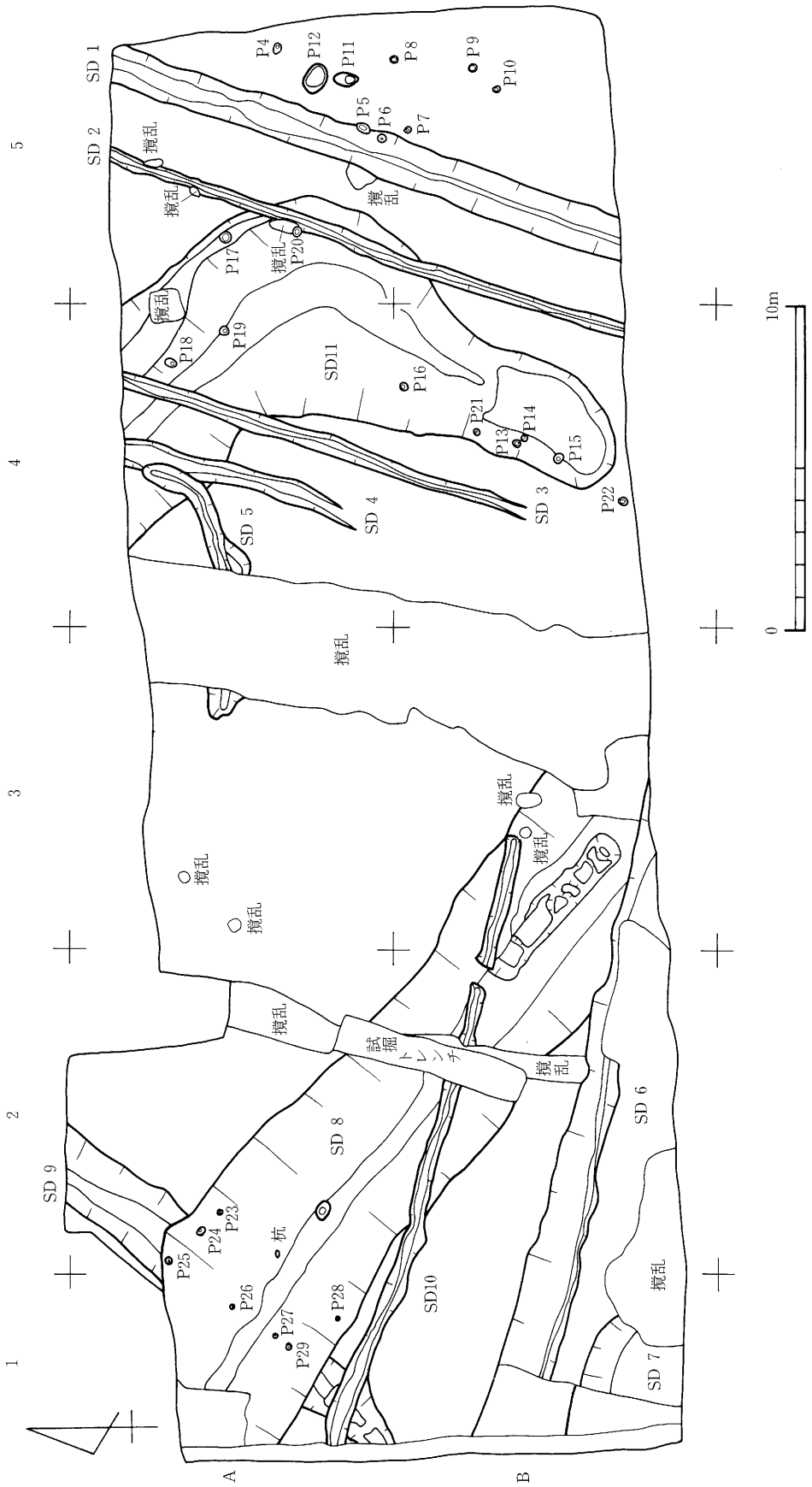
Ｖｄ層は、厚さ20cm前後で、2.5Y3/1 黒褐色粘土である。

Ⅴ層もⅥ層同様プラント・オパール分析のため土壌を採取した。

第Ⅵ層：B-４、B-５試掘区でⅥ層上面まで掘り下げた。10YR4/2 灰黄褐色粘土で砂粒を少量含む。



SD8 調査風景


SD 1
SD 2
SD 3
SD 4
SD 5
SD 6
SD 7
SD 8
SD 9
SD10
SD11
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P28
P29
杭
撹乱
試掘トレンチ
A
B
1
2
3
4
5
0
10m

第６図　遺構全体図

第２章　検出された遺構と遺物

第１節　遺構の検出状況と概要

Ⅰ・Ⅱ層を重機によって除去し、Ⅲ層から調査しようとしたが、Ⅲ層は西端部の一部しか存在せず、遺構が検出できなかったため人力によってⅣａ層上面まで除去した。Ⅰｃ層（現代の耕作土）によりⅣａ層上面まで撹拌されていることから、検出された遺構はⅣａ層から掘り込まれた遺構だけでなく、それよりも上の層から掘り込まれた遺構もあると推定される。

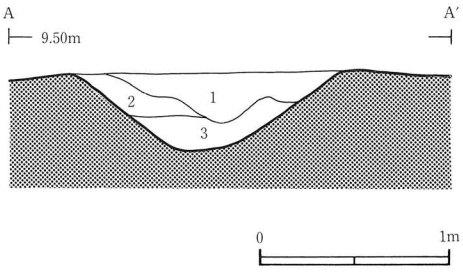
ここでは、切り合いなどから判断し、新しい遺構（中世及び近世）を第２節に、それより古い遺構（古代及び中世）を第３節に分けてまとめた。

第２節　Ⅳａ層の遺構と遺物（１）

SD 1

調査区東端部Ａ・B-５グリッドにかけて検出された。方向はＮ－22°－Ｅである。上端部は130cm前後、下端幅は12～57cm、深さは約60cmで、底面はやや凹凸があるが比較的平坦である。断面形は「U」字形に近く、壁は皿状の底面から緩やかに立ち上がり、外方に大きく開いている。確認された堆積土は３層で、いずれも自然堆積層である。出土遺物はほとんどが磨滅しており図示できるものはないが、ロクロ調整の土師器の坏・甕、須恵器の坏・瓶、赤焼土器、陶器（相馬）などが出土している。

SD １～４がほぼ平行し、SD10と直交することから、これらは何らかの区画に関わる溝と推定されるが断定はできない。

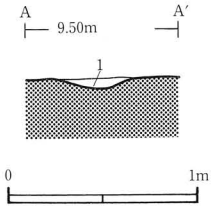


層位	色　調	性　質	備　考
1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトをブロック状に微量含む。
2	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトをブロック状に少量含む。
3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトをブロック状に多量含む。

第７図　SD1 断面図

SD 2

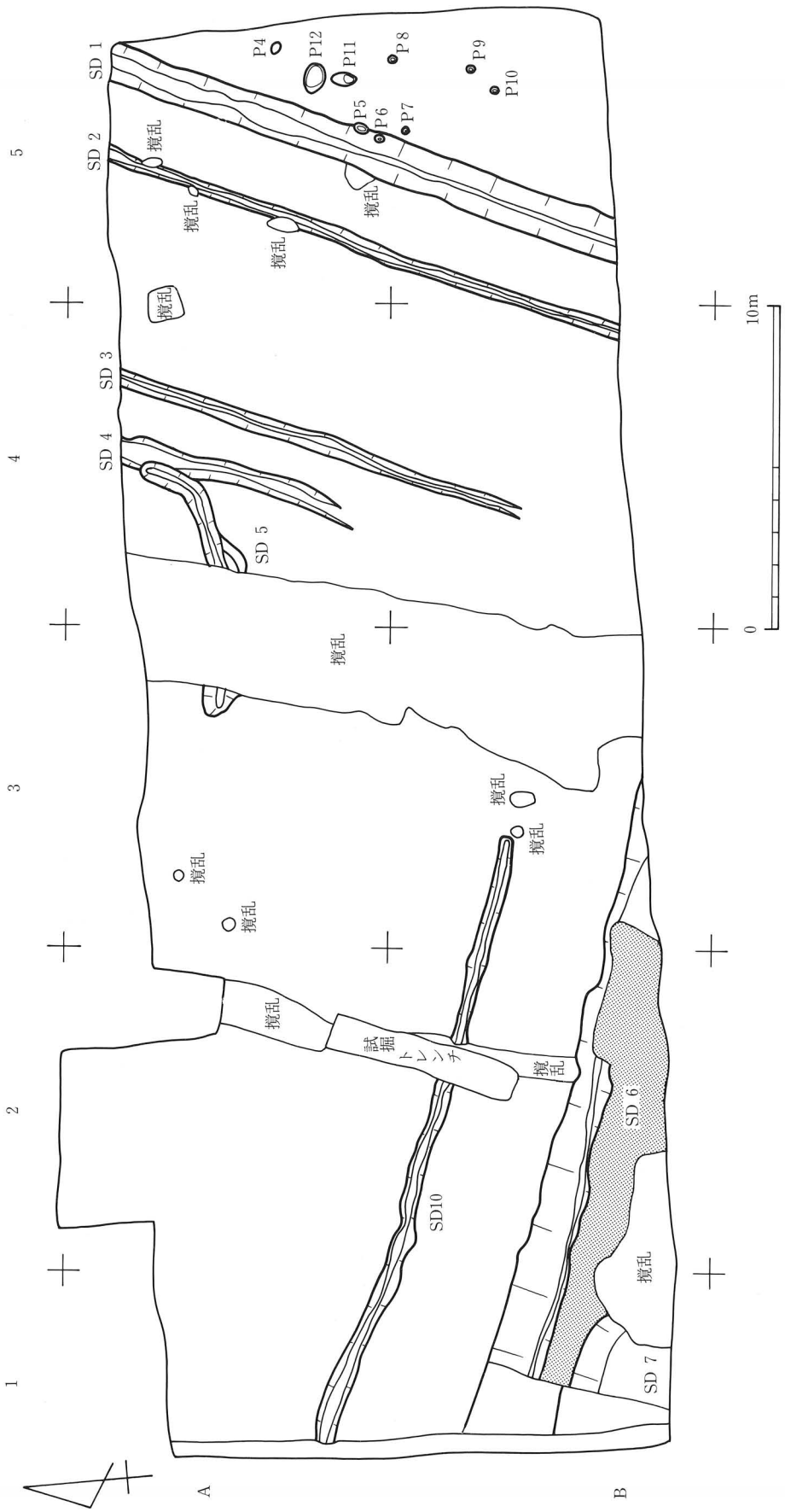
調査区東部Ａ・B-５グリッドにかけて検出された。SD11と重複関係にあり、切っていることから本遺構が新しい。方向はＮ－20°－Ｅである。上端幅は50cm前後、下端幅は約15cm、重機と人力によりⅣa層中まで掘りすぎたため確認した深さは５cmであるが、断面観察によると約15cmである。断面形は皿状をなしており、壁は底面から緩やかに外方に開いている。確認された堆積土は１層のみである。出土遺物はない。SD１同様何らかの区画に関わる溝と推定されるが断定はできない。



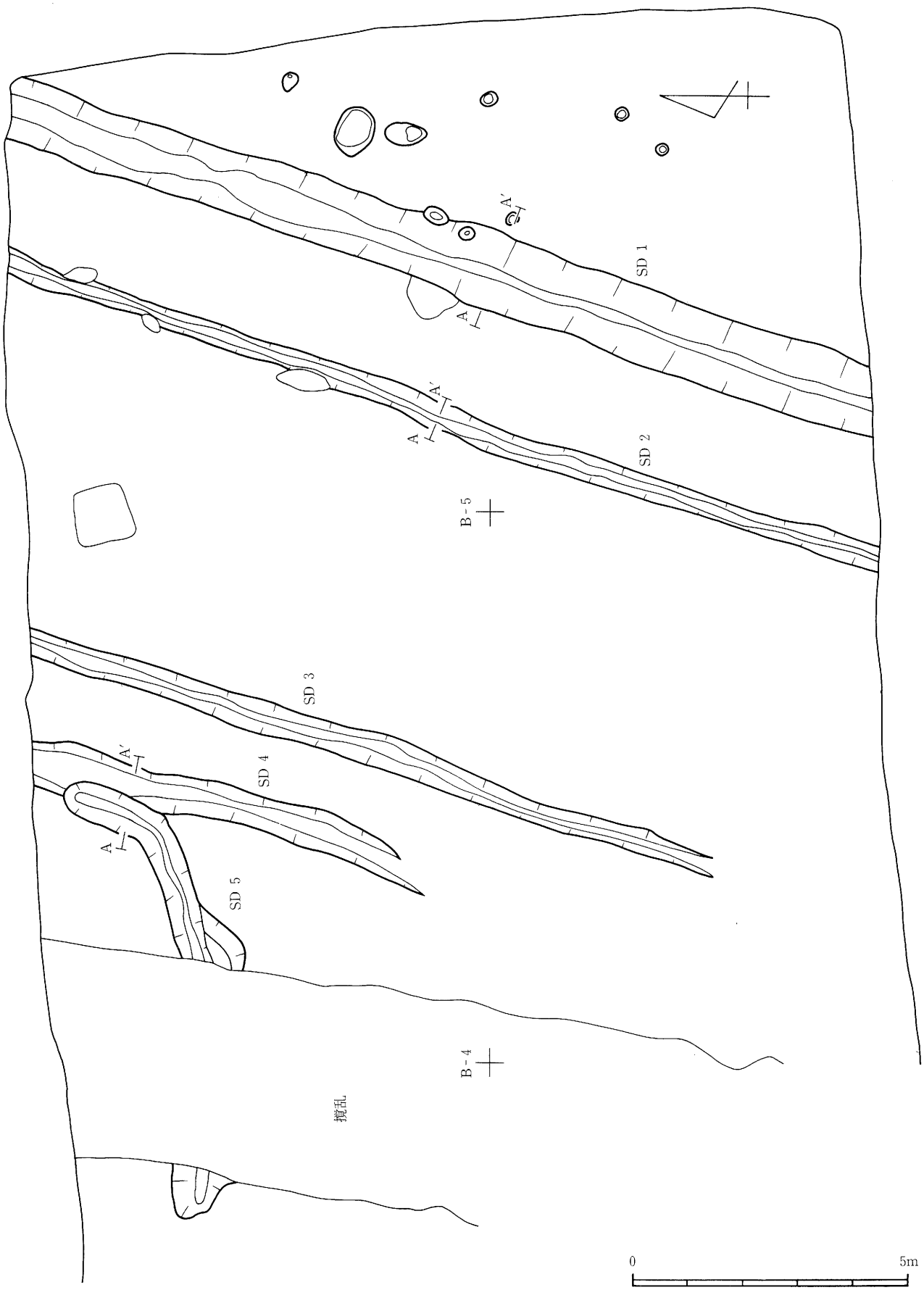
SD １・２調査風景

層位	色　調	性質	備　考
1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄を斑紋状に少量含む。木炭粒を微量に含む。

第８図　SD2 断面図



第９図　Ⅳａ層上面全体図（１）



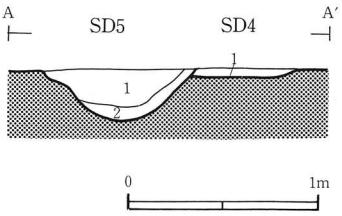
第10図　SD １～５平面図

SD 3

調査区東部A•B-４グリッドにかけて検出された。SD11と重複関係にあり、切っていることから本遺構が新しい。方向はN－22°－Eである。上端幅は60cm前後、下端幅は10～30cm、深さは１～２cmである。断面形は皿状をなしており、壁は底面から緩やかに外方に開いている。確認された堆積土はSD ４と同じで１層からなる。深さ１～２cmのため、断面図は作成していない。出土遺物はない。SD １同様何らかの区画に関わる溝と推定されるが断定はできない。

SD 4

調査区東部A-４グリッドにかけて検出された。SD ５•11と重複関係にあり、SD ５に切られSD11を切っていることから、本遺構はSD ５より古く、SD11より新しい。方向はN－18°－Eである。上端幅は60～100cm、下端幅は20～80cm、深さは５cmである。断面形は皿状をなしており、壁は底面から緩やかに外方に開いている。確認された堆積土は１層のみである。出土遺物は図示できるものはないが、ロクロ調整の土師器の甕が出土している。SD １同様何らかの区画に関わる溝と推定されるが断定はできない。



SD 5

調査区中央部A-３・４グリッドにかけて検出された。SD ４とSD11と重複関係にあり、ともに切っていることから本遺構が新しい。方向はN－72°－Eである。上端幅は60cm前後、下端幅は10～20cm、深さ27cmであり、底面はやや凹凸があるが比較的平坦である。

SD4

層位	色　調	性　質	備　考
1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルトをブロック状に微量含む。

SD5

層位	色　調	性　質	備　考
1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	2.5Y3/2 黒褐色粘土をブロック状に少量含む。
2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	

第11図　SD4・５断面図

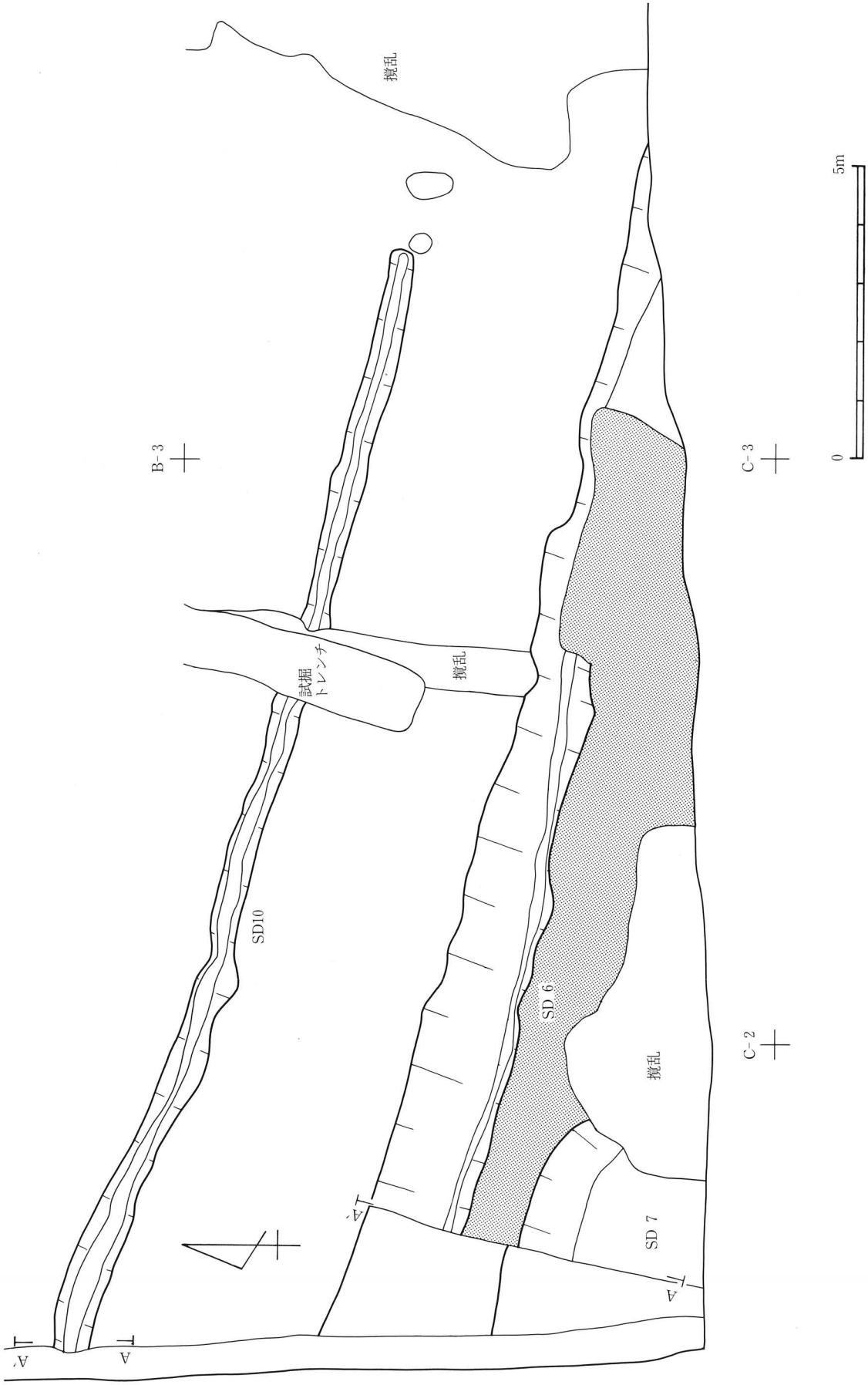
断面形は「U」字形を呈し、壁は底面から上部にかけて緩やかに大きく開く。確認された堆積土は２層で、いずれも自然堆積層である。出土遺物は図示できるものはないが、ロクロ調整の土師器の坏、小片のため年代は不明である陶器が出土している。両端が徐々に浅くなりそれ以上確認できなかったため、何のための溝かは不明である。

SD 6

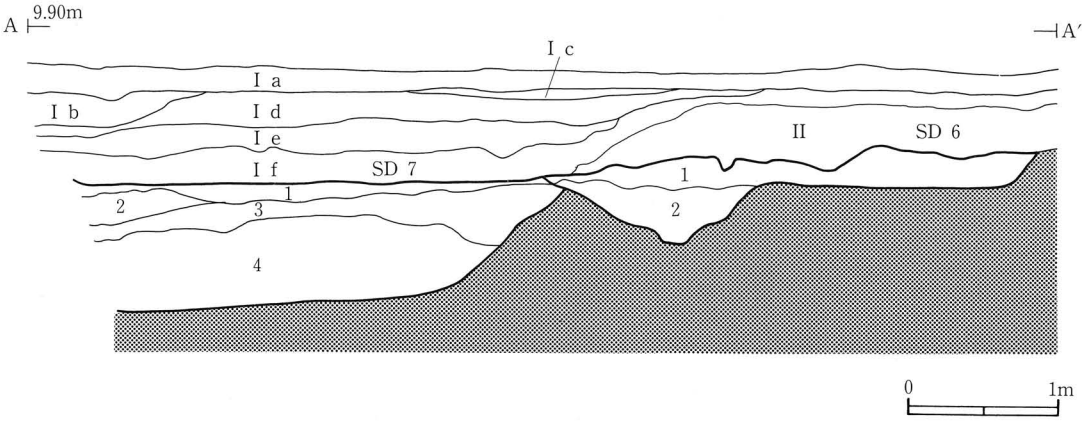
調査区南西部B-１・２・３グリッドにかけて検出された。SD ７とSD ８と重複関係にあり、ともに切っていることから本遺構が新しい。方向はN－85°－Wである。当初、SD ７と同遺構と考え掘り進めたが、後に下層の堆積土の違いや断面観察によって違う遺構であると判明した。なお、南側の上端が掘りすぎにより破壊された（第12図アミ点部分）ために明確ではないが、断面で確認すると上端幅は268cm、下端幅は約10cm、深さ61cmである。断面形は、下部は「V」字形に近く、壁は幅の狭い底面から大きく開きながら立ち上がり、上部北側は段状になっている。確認された堆積土は２層で、いずれも自然堆積層である。出土遺物のうち、図示できたのが上層から出土したロクロ調整後ナデが施された土師質土器（第14図、写真36）である。他に磨滅のため図示できなかったが、ロクロ調整の土師器の坏や甕、須恵器の甕、小片のため年代が不明である陶器、銅銭などが出土している。なお、第13図の第１層は本遺構の堆積土ではなく、II層の頃の耕作によって撹拌された基本層の可能性も考えられる。底面のレベルは調査区内ではほとんど高低差はないが、下層は粗砂と粘土の互層になっていることから水路の可能性が高く、周辺の地形から考えて西から東へ流れていたと推測される。

SD 7

調査区南西部B-１グリッドで検出された。SD ６と重複関係にあり、切られていることから本遺構が古い。方向はN－49°－Wと推定される。ほとんどが調査区外に延び、また、東部は撹乱により破壊されているため実際の規模は不明であるが、確認した規模は、上端幅は337cm、下端幅は189cm、深さは100cm前後である。断面形は船底形をなし



第12図　SD 6・7・10平面図



SD6

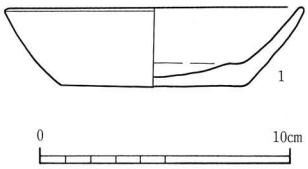
層位	色　　調	性　質	備　　考
1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	10YR3/2 黒褐色粘土をブロック状に少量含む。酸化鉄を斑紋状に多量含む。
2	10YR5/3 にぶい黄褐色 10YR4/2 灰黄褐色 10YR3/2 黒褐色	粗砂 粘土 粘土	互層。酸化鉄を管状に少量含む。

SD7

層位	色　　調	性　質	備　　考
1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄を管状に含む。
2	2.5Y5/2 酸灰黄色 10YR5/2 灰黄褐色	細砂 シルト	互層。酸化鉄を管状に少量含む。
3	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	10YR5/2 灰黄褐色粘土をブロック状に多量含む。酸化鉄を管状に少量含む。
4	2.5Y5/2 暗灰黄色	細砂	酸化鉄を管状に少量含む。

第13図　SD6・7 断面図

ており、広い底面から緩やかに立ち上がる。確認された堆積土は４層で、いずれも自然堆積層である。出土遺物はない。検出された長さは短く、高低差は不明であるが、下層に砂が厚く堆積していることから大きな水路の可能性が考えられる。

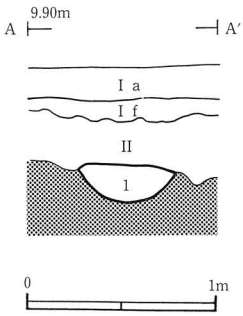


No.	写真図版	遺　構・層　位	種　　別	器種	遺存度	法　量（cm）			底径	色　　調	特　　徴
						口径	底径	器高			
1	36	SD 6　l 1	土師質土器	小皿	3/4	12.0	7.5	3.3	－	にぶい黄橙色	(内・外)ロクロ調整後ナデ

第14図　SD6 出土遺物

SD10

調査区西部A-１、B-２・３グリッドにかけて検出された。SD８とSD９と重複関係にあり、切っていることから本遺構はそれらより新しい。方向はN－76°－Wである。上端幅は50～70cm、下端幅は10～30cm、深さは20cm前後であり、底面はやや凹凸があるが比較的平坦である。断面形は「U」字形に近く、底面は皿状をなし、壁はそこから緩やかに屈曲して立ち上がっている。確認された堆積土は１層のみである。出土遺物は、ほとんど磨滅していて図示できるものはないが、底部の切り離しは回転糸切りで再調整はされていない土師器の坏、ロクロ調整の土師器の甕、須恵器の瓶、土師質土器が出土している。SD１同様、何らかの区画に関わる溝と推定されるが断定はできない。

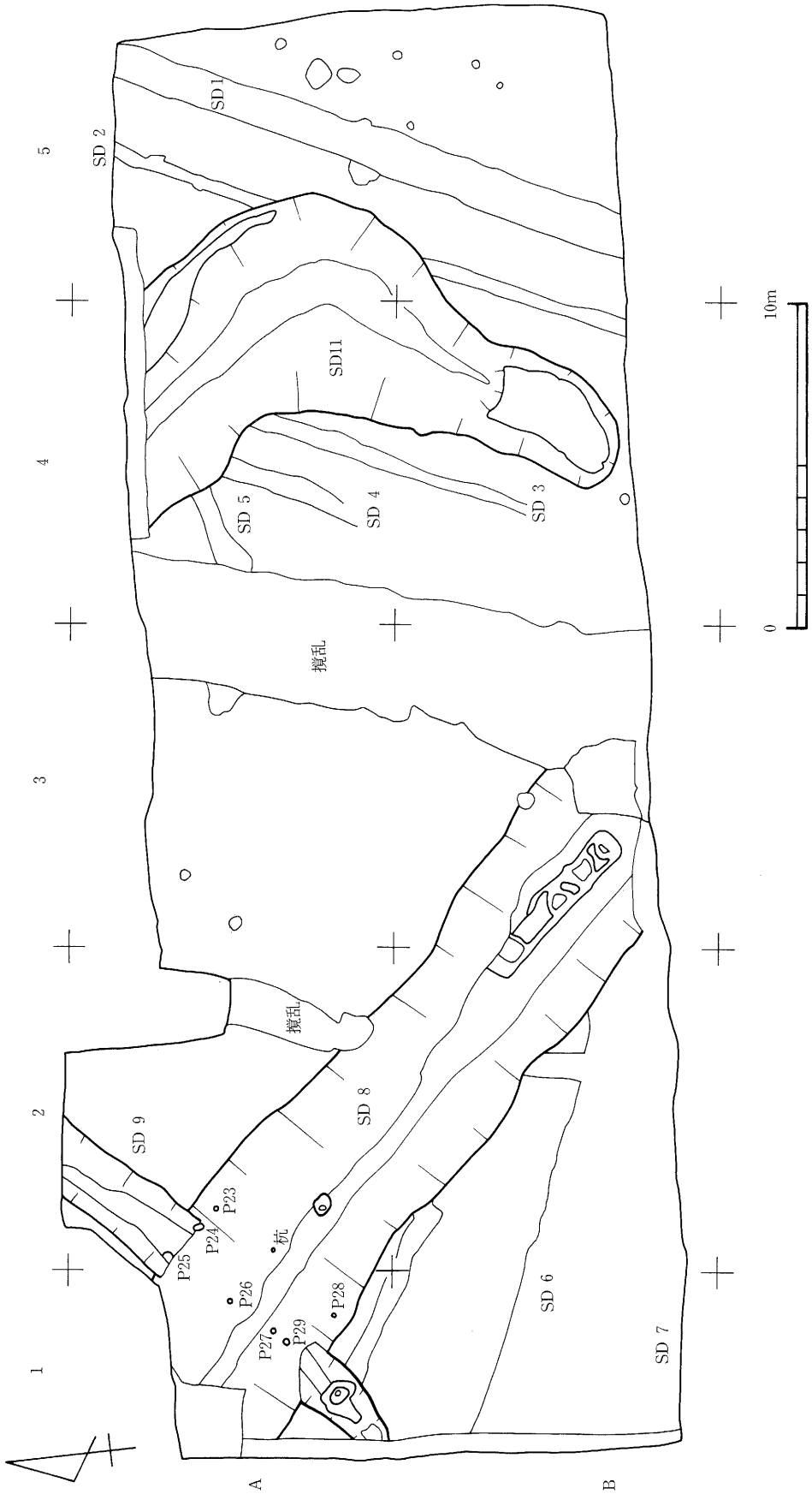


層位	色　　調	性質	備　　考
1	10YR4/2 灰黄褐色	粘　土	酸化鉄を斑紋状に多量含む。

第15図　SD10 断面図

ピット

調査区東部に集中し22基検出された。P10 から磨滅しているため判断しにくいが、土師器甕の小片が１点出土している。いずれも組み合わず、柱痕跡も見つからなかったことから、柱穴ではないと考えられるが、性格は不明である。



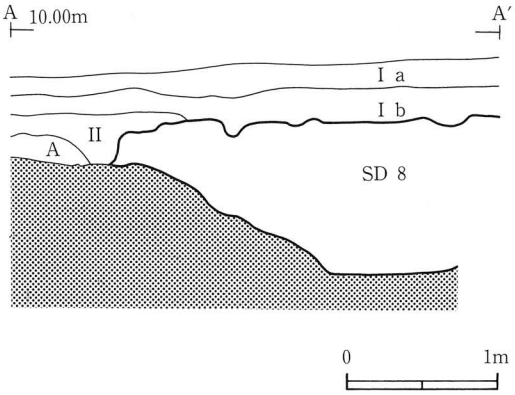
第16図　Ⅳａ層上面全体図（２）

第３節　IV a 層の遺構と遺物（２）

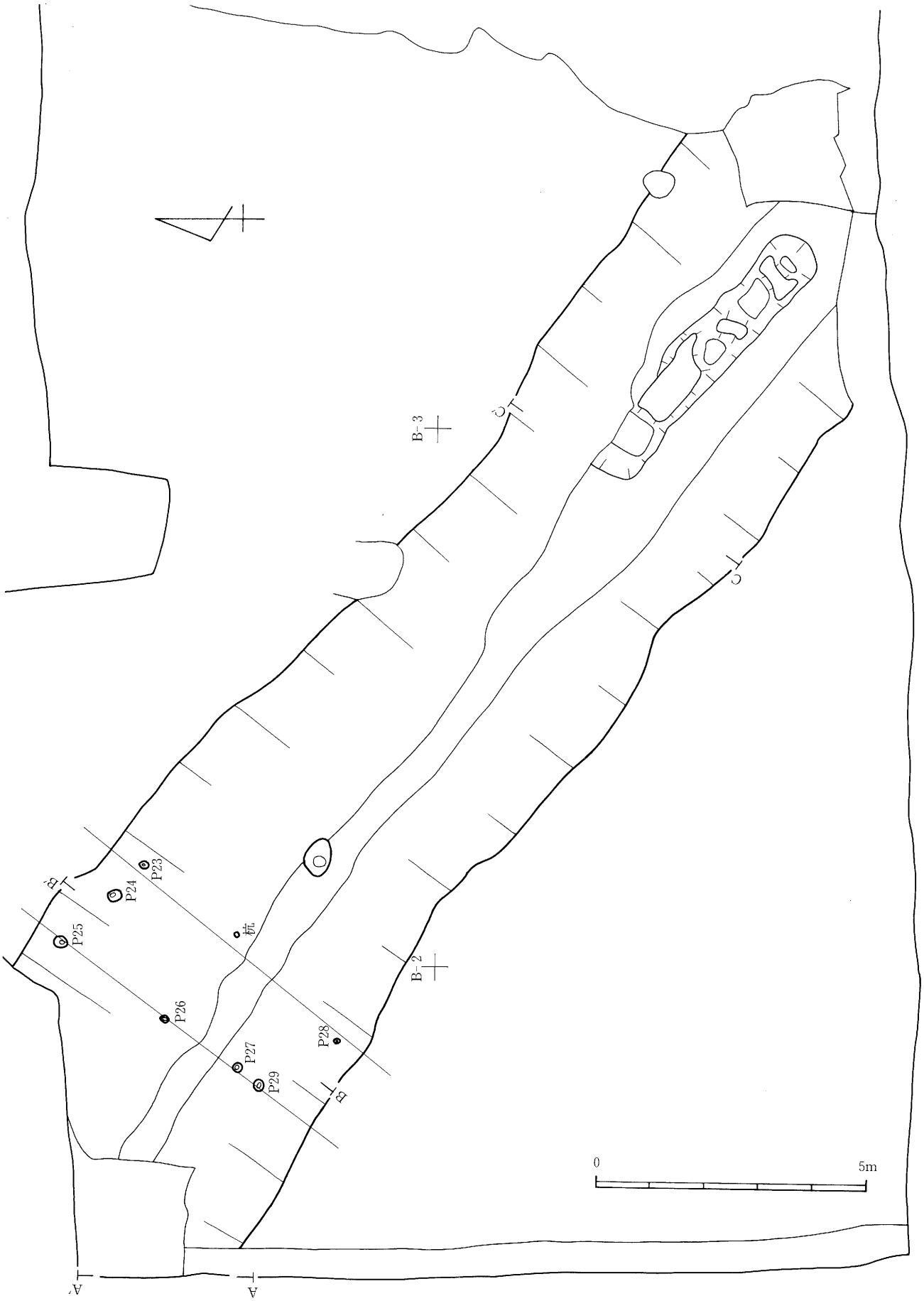
SD8

調査区西部 A-１、B-１・２グリッドにかけて検出された。SD ６、SD ９、SD10 と重複関係にあり、SD ９を切り、SD ６と SD10 に切られていることから、本遺構は、SD ９より新しく、SD ６と SD10 より古い。なお、断面図（１）に示した A 層は基本層ではなく、SD ８を掘り込んだときの盛土と考えられる。方向は N－49°－W である。上端幅は600cm前後、下端幅は、調査区西側では70cm前後、調査区東側では210～230cm、深さは160～200cmである。底面は調査区西側はやや凹凸があるが比較的平坦である。調査区東側は底面が広く、長さ560cm前後、幅100cm前後の範囲で、底面より深さ15cm前後の窪みが連続してみられた。断面形は、西側で「V」字形に近く、壁は幅の狭い底面から大きく開きながら立ち上がり、東側は逆台形状をなしており、壁は底面からやや急な立ち上がりをしている。調査区西側で橋脚跡と見られるピット７基、木の杭１本が検出された。P23 は径15cm・深さ26cm・堆積土10YR3/2 黒褐色粘土でにぶい黄褐色シルトブロックを含む。P24 は径28cm・深さ49cm・堆積土は P23 と同じである。P25 は径27cm・深さ24cm・堆積土は P23 と同じである。P26 は径14cm・深さ27cm・堆積土は10YR2/1 黒色粘土で杭の痕跡が見られた。P27 は径18cm・深さ41cm・堆積土は2.5Y3/1 黒褐色粘土で砂粒を多量に含み杭の痕跡が見られた。P28 は径10cm・深さ29cm・堆積土は P23 と同じである。P29 は径20cm・深さ42cm・堆積土は2.5Y3/2 黒褐色粘土である。木の杭は径約９cm・遺存長50cmであった。ピットの各間隔は P25～26 が230cm、P26～27 が160cm、P27～P29 が60cm、P23～木杭が220cm、木杭～P28 が270cm、P25～P24 が110cm、P24～P23 が90cm、P26～木杭が200cmである。実際はもっと多くの杭が使われていたと推測されるが検出はできなかった。堆積土は調査区の東部と西部では異なっているがいずれも自然堆積層で、レンズ状の堆積状況を示している。出土遺物は、ほとんどが最下層から出土している。図示できたのが上層からロクロ調整の土師質土器、下層から龍泉窯系の青磁の皿、ロクロ調整の土師器の坏や甕、縄文土器深鉢、漆器の椀(写真22)、調査区東部から、外面はタタキ、内面はナデが施されている須恵器の甕や長頸瓶（第22・23図、写真37～39）である。他にも磨滅していて図示できなかったが、ロクロ調整の土師器の坏や甕、赤焼土器、ロクロ調整の土師質土器、須恵器の坏・甕・鉢、在地や東海地方産の陶器、瓦などが多数出土している。しかし、遺構に伴う遺物は確実に限定できず、大部分は混入品であると考えられる。なお、堆積土は下層が粘土と粗砂の互層になっており、水路として利用されていたと考えられる。底面のレベルは、調査区内ではほとんど高低差はないが、地形から判断して西から東へ流れていたと推測される。また、調査区東部の下層から長さ50～150cmの河原石が多数出土した(写真23)。その河原石は、調査区から東へ80m のところにある安久諏訪古墳から出土してい

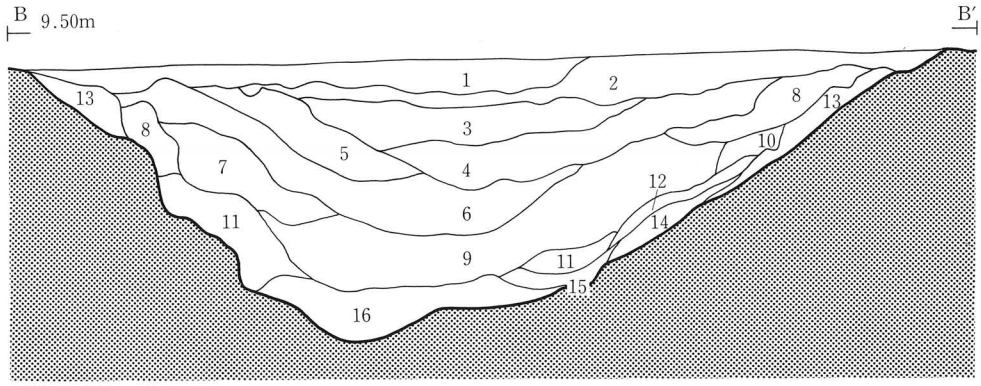
SD ８調査風景

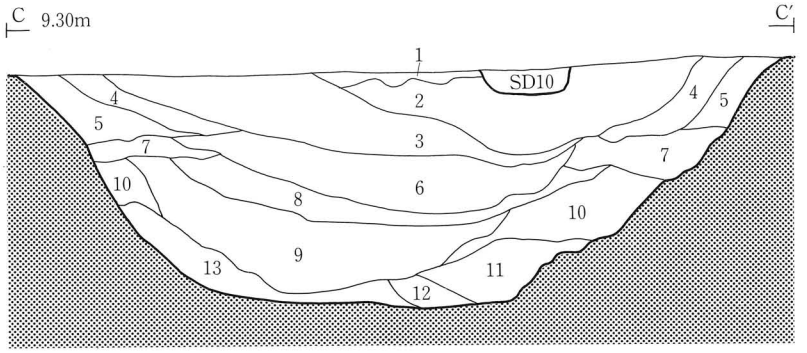


第17図　SD ８断面図（１）



第18図　SD 8平面図





0　1m

B-B′

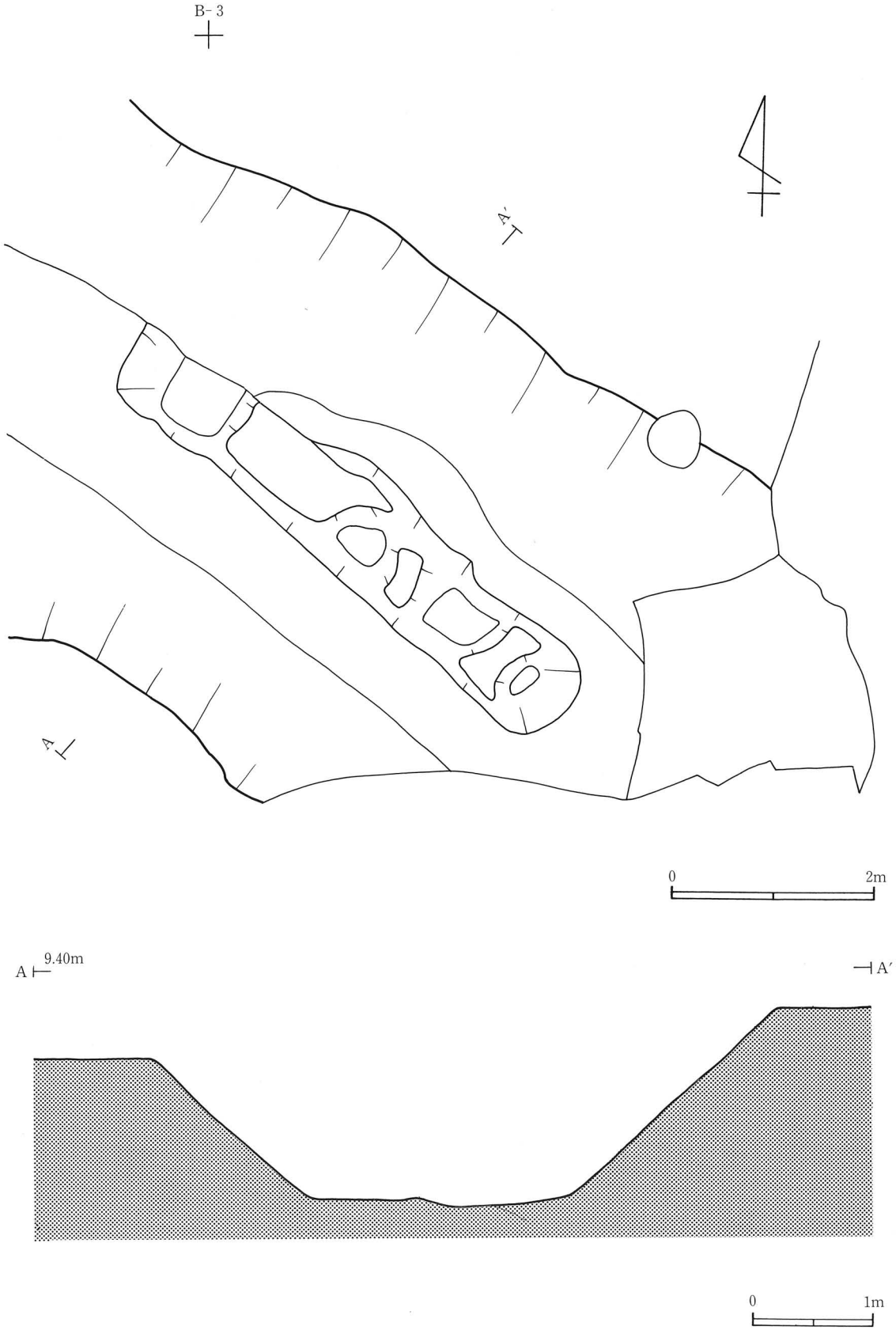
層位	色　調	性　質	備　考
1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトをブロック状に微量含む。
2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	
3	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を斑紋状に多量含む。
4	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を管滋養に多量含む。10YR5/3 黄褐色砂質シルトをブロック状に少量含む。
5	10YR4/3 にぶい黄褐色	細砂	酸化鉄を管状に少量含む。10YR4/2 灰黄褐色粘土をブロック状に微量含む。
6	2.5Y5/1 黄灰色	シルト	酸化鉄を管状に少量含む。10YR4/2 灰黄褐色粘土ブロック状に微量含む。
7	2.5Y5/2 暗灰黄色	粘土	酸化鉄を管状に少量含む。2.5Y5/1 黄灰色シルトをブロック状に少量含む。
8	10YR3/2 黒褐色	粘土	10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルトをブロック状に微量含む。
9	10YR4/2 灰黄褐色 10YR3/1 黒褐色 10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土 腐植質粘土 粗砂	互層。酸化鉄を管状に少量含む。
10	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	10YR3/2 黒褐色粘土をブロック状に多量含む。
11	10YR4/1 褐灰色	粘土	10YR4/2 灰黄褐色細砂をブロック状に少量、2.5Y3/1 黒褐色砂質シルトをブロック状に微量含む。
12	10YR2/1 黒色	粘土	10YR4/2 灰黄褐色粘土をブロック状に少量含む。
13	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	10YR3/2 黒褐色粘土をブロック状に少量含む。
14	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄を管状に少量含む。10YR4/1 褐灰色粘土をブロック状に少量含む。
15	2.5Y4/2 暗灰黄色 2.5Y3/2 黒褐色	粘土	互層。
16	2.5Y3/2 黒褐色 10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土 粗砂	互層。部分的に10YR3/1 黒褐色シルトをブロック状に微量含む。

C-C′

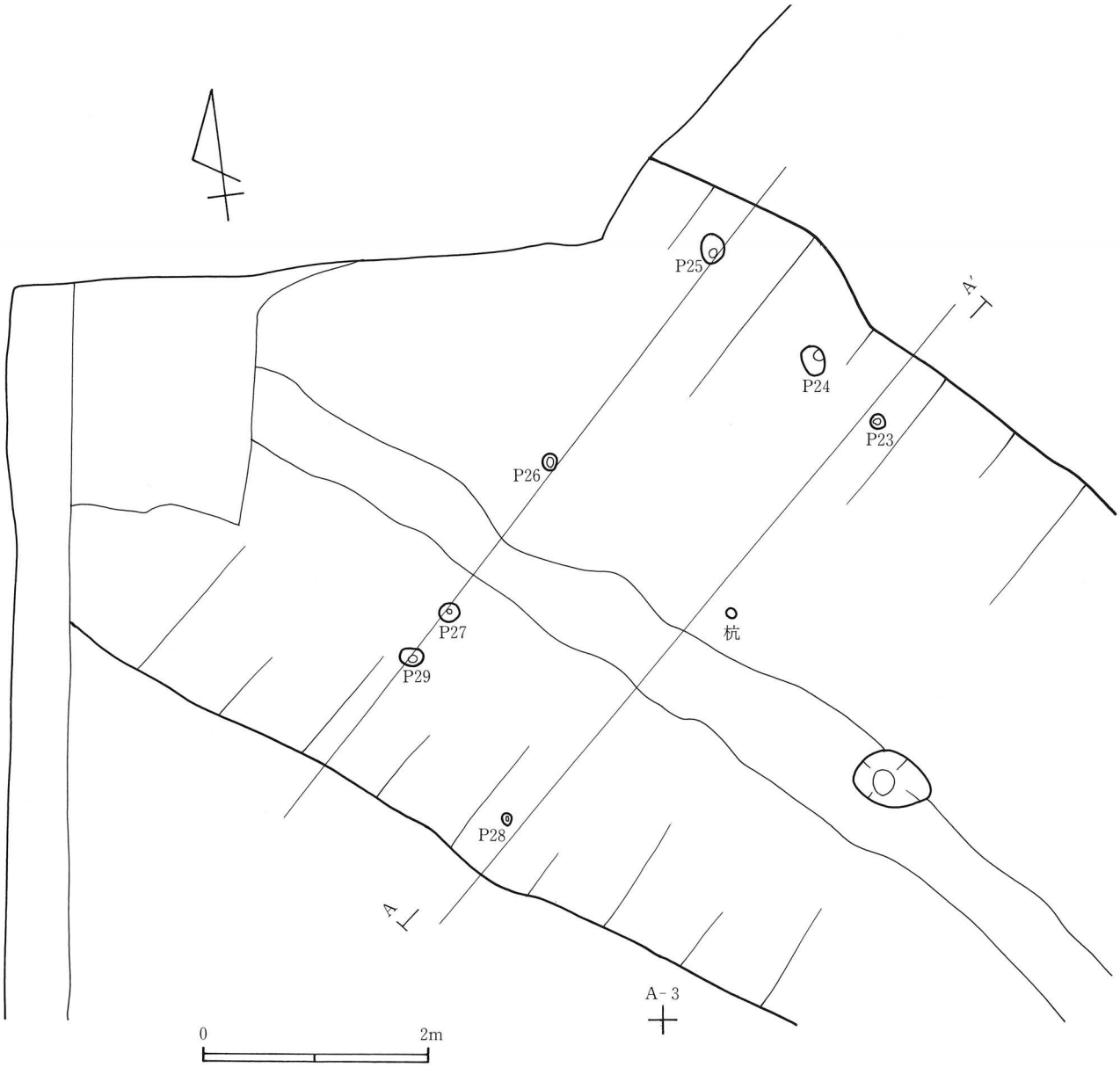
層位	色　調	性　質	備　考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	10YR5/3 にぶい黄褐色細砂をブロック状に微量含む。
2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄を管状に多量含む。マンガン粒を微量含む。
3	10YR5/2 灰黄褐色	細砂	10YR4/2 灰黄褐色粘土をブロック状に少量含む。酸化鉄をブロック状に多量含む。
4	10YR3/2 黒褐色	粘土	10YR4/2 灰黄褐色粘土をブロック状に微量含む。酸化鉄を管状に少量含む。
5	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	2.5Y3/2 黒褐色粘土をブロック状に少含む。
6	2.5Y5/2 暗灰黄色	粘土	酸化鉄を斑紋状に少量、管状に少量含む。2.5Y5/2 細砂多量。10YR4/2 灰黄褐色砂と部分的に互層となる。
7	10YR4/1 褐灰色	粘土	砂粒少量、酸化鉄管状に少量含む。
8	2.5Y5/2 暗灰黄色	粘土	2.5Y5/2 細砂多量。10YR4/2 灰黄褐色砂と部分的に互層となる。
9	10YR4/2 灰黄褐色 10YR4/3 にぶい黄褐色 10YR3/2 黒褐色	シルト 粗砂 腐植質粘土	互層。酸化鉄を管状に少量含む。
10	10YR4/1 褐灰色	粘土	10YR4/2 灰黄褐色細砂をブロック状に少量含む。
11	10YR4/1 褐灰色 10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土 粗砂	部分的に10YR4/2 灰黄褐色腐植質粘土と互層になる。植物遺体を微量に含む。
12	10YR4/1 灰色	粘土	5Y3/1 オリーブ黒粘土をブロック状に多量に含む。
13	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	砂粒を多量、木炭粒を多量含む。

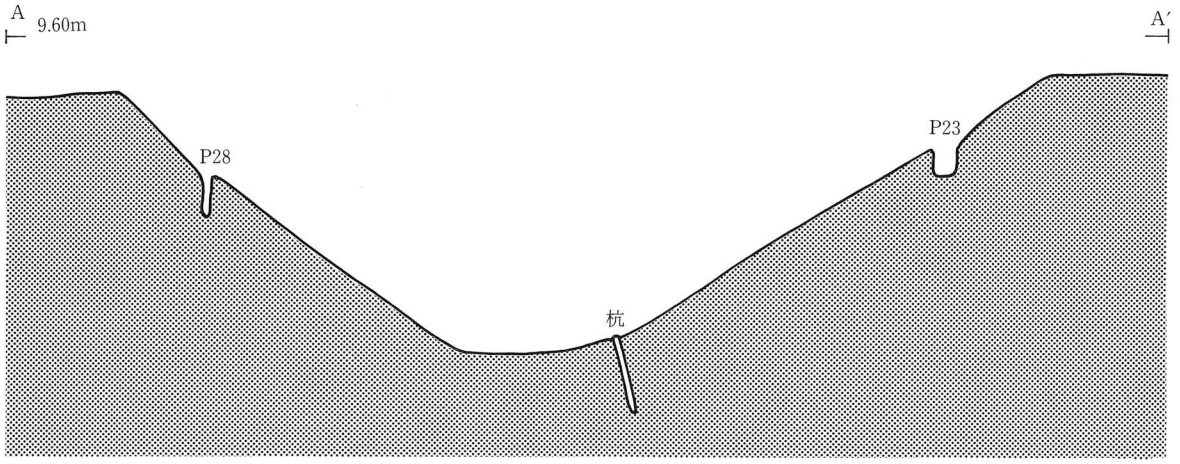
第19図　SD8 断面図（２）

る石室のものと同規模であることから、ここにも以前古墳があり、その石室が何らかの理由で破壊されて本遺構に混入した可能性も考えられる。なお、前述した須恵器の甕も河原石と同じところから集中して出土したことを考えると、古墳と何らかの関係があると推定される。

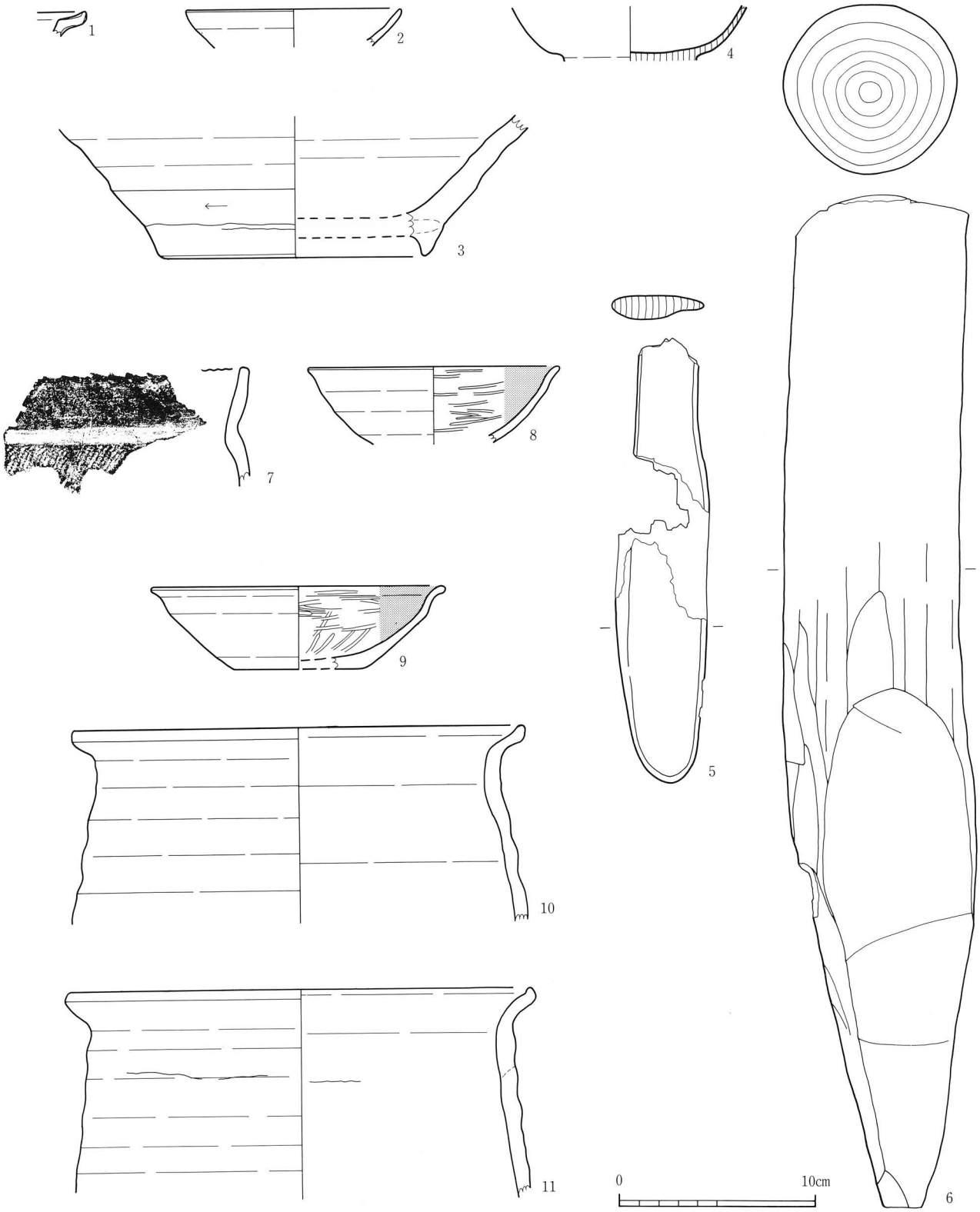


第20図　SD 8 平面・断面図（東部）





第21図　SD ８平面・断面図（橋脚部）

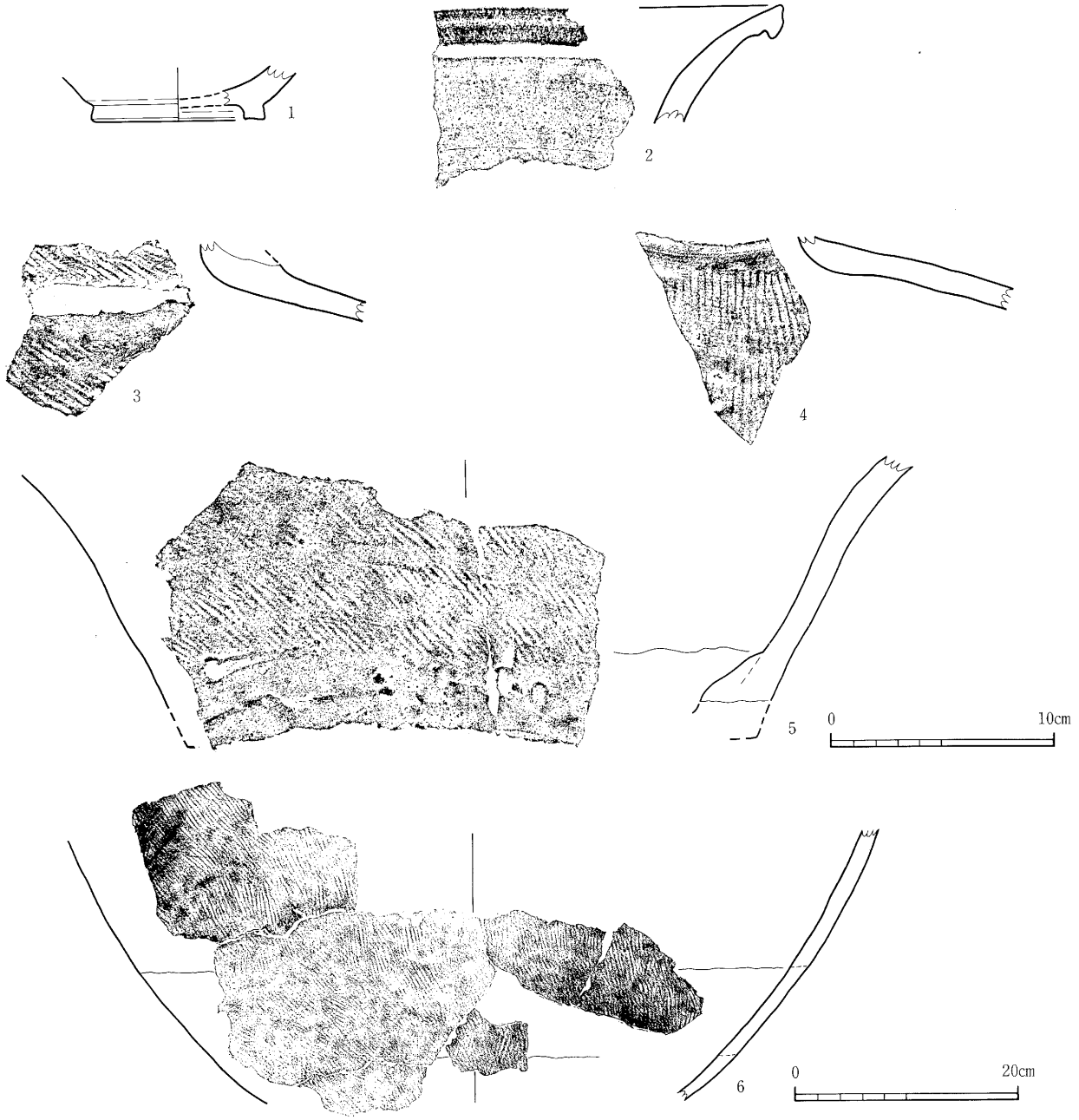


No.	写真図版	遺構・層位	種別	器種	遺存度	法量(cm) 口径	底径	器高	色調	特徴
1	37－2	SD 8　下層	磁器(青磁)	皿	口縁小片	?	?	?	(釉)緑灰色	龍泉窯系
2	37－1	SD 8　上層	土師質土器	小皿	体部上半1/6	(11.2)	?	?	橙色	ロクロ調整
3	37－3	SD 8　下層	須恵器	鉢	底部　1/6	?	(13.4)	?	灰色	(外)ロクロ調整、一部回転ヘラケズリ (内)ロクロ調整
4	38－2	SD 8　下層	木製品	漆器・椀	体部下半遺存	?	(6.8)	?	(外)赤 (内)暗赤	(内・外)赤漆

No.	写真図版	遺構・層位	種別	遺構度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴
5	37－4	SD 8　下層	木製品、用途不明	端部欠損	(22.9)	4.7	1.2	－	ヘラ状
6	38－1	SD 8　底面	木製品、杭	端部欠損	(53.3)	径	8.8	－	橋脚の先端

No.	写真図版	遺構・層位	種別	器種	遺存度	法量(cm) 口径	底径	器高	底径/口径	色調	特徴
7	39－1	SD 8 下層	縄文土器	深鉢	口縁小片	?	?	?	－	黒褐色	波状口縁、体部ＬＲ縄文
8	38－4	SD 8 下層	土師器	杯	1/7	(12.8)	?	?	?	(外)にぶい黄橙色 (内)黒色	(外)ロクロ調整 (内)ヘラミガキ・黒色処理
9	38－3	SD 8 下層	土師器	杯	1/6	(15.0)	(6.4)	4.3	0.43	(外)にぶい黄橙色 (内)黒色	(外)ロクロ調整・底部切離法不明(磨滅) (内)ヘラミガキ・黒色処理
10	38－5	SD 8 下層	土師器	甕	上部 1/5	(23.0)	?	?	－	(外)にぶい黄橙色 (内)灰黄褐色	(内・外) ロクロ調整
11	38－6	SD 8 下層	土師器	甕	上部 2/5	(23.4)	?	?	－	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	(内・外)ロクロ調整、内面に炭化物付着

第22図　SD 8 出土遺物（１）

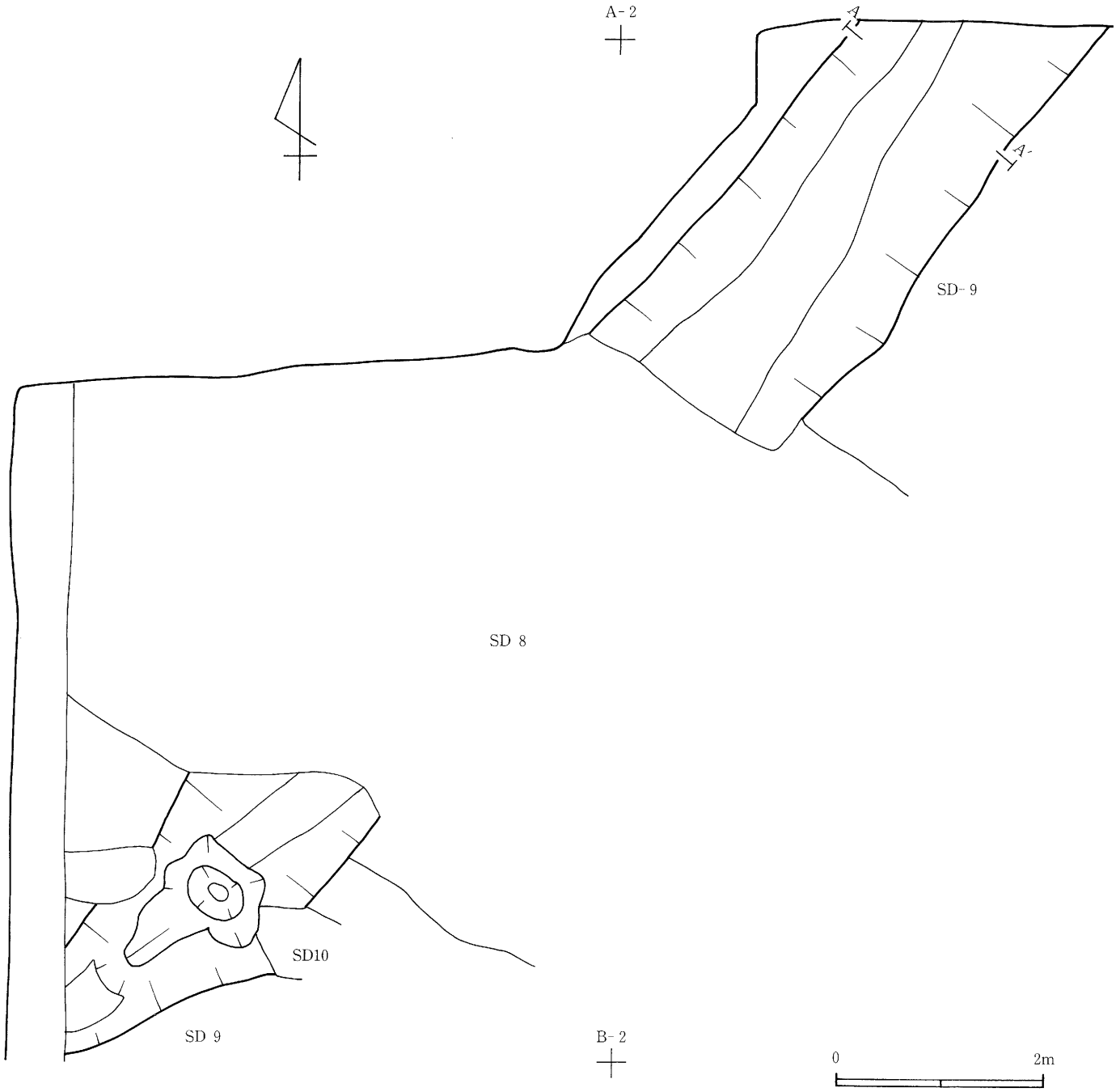


No.	写真図版	遺構・層位	種別	器種	遺存度	法量(cm) 口径	底径	器高	色調	特徴
1	39－2	SD 8 下層	須恵器	長頸瓶	底部1/7	?	(7.8)	?	灰白色	(内・外)ロクロ調整、大戸窯 K12 窯式
2	39－3	SD 8 下層	須恵器	甕	口縁小片	?	?	?	(外)暗灰色(内)灰色	(内・外)ロクロ調整
3	39－5	SD 8 下層	須恵器	甕	肩部小片	?	?	?	灰色	(外)タタキ、凸帯の剝離痕　(内)ナデ
4	39－6	SD 8 下層	須恵器	甕	肩部小片	?	?	?	灰色	(外)タタキ　(内)ナデ
5	39－4	SD 8 下層	須恵器	甕	底部1/4	?	?	?	灰色	(外)タタキ　(内)ナデ
6	39－7	SD 8 下層	須恵器	甕	体部下半1/4	?	?	?	灰色	(外)タタキ　(内)ナデ

第23図　SD8 出土遺物（２）

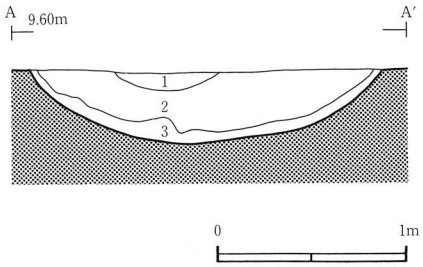
SD 9

調査区西部A-１・２グリッドにかけて検出された。SD８とSD10と重複関係にあり、ともに切られていることから、本遺構はそれらより古い。方向はN－42°－Eである。上端幅は200cm前後、下端幅は40～80cm、深さ30cm前後である。断面形は皿状をなしており、壁は底面から緩やかに外方に開いている。底面は比較的平坦であるが凹凸があり、調査区南側で20～30cmの土坑状の窪みが検出された。堆積土は３層確認され、いずれも自然堆積層であり、第１層に



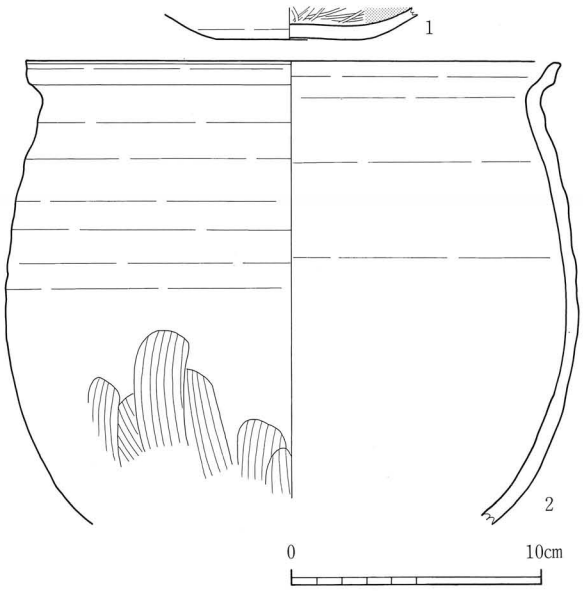
第24図　SD ９平面図

灰白色火山灰のブロックを多量に含んでいる。出土遺物は、図示できたのが、ロクロ調整で内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている土師器の坏、ロクロ調整後下半にヘラナデが施されている土師器の甕である（第26図、写真40）。他にも磨滅していて図示できなかったがロクロ調整の土師器の甕、須恵器の瓶、磁器などが出土している。磁器については近世以降の遺物であり、遺構に伴うものではなく、上層からの混入品であると考えられる。



層位	色　調	性　質	備　考
1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	灰白色火山灰をブロック状に多量含む。
2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR4/3にぶい黄褐色シルトをブロック状に少量、木炭粒を微量に含む。
3	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色粘土をブロック状に微量に含む。

第25図　SD9 断面図



No.	写真図版	遺構・層位	種別	器種	遺存度	法量（cm） 口径	底径	器高	底径	色調	特徴
1	40－1	SD 9　l 1	土師器	坏	底部のみ	?	6.0	?	?	(外)にぶい黄橙色 (内)黒色	(外)ロクロ調整、底部－回転糸切無調整 (内)ヘラミガキ・黒色処理
2	40－2	SD 9　l 1	土師器	甕	上半1/3	(21.5)	?	?	－	(外)にぶい黄橙色 (内)灰褐色	(外)上半ロクロ調整、下半ロクロ後ヘラナデ (内)上半ロクロ調整、下半不明(磨滅)

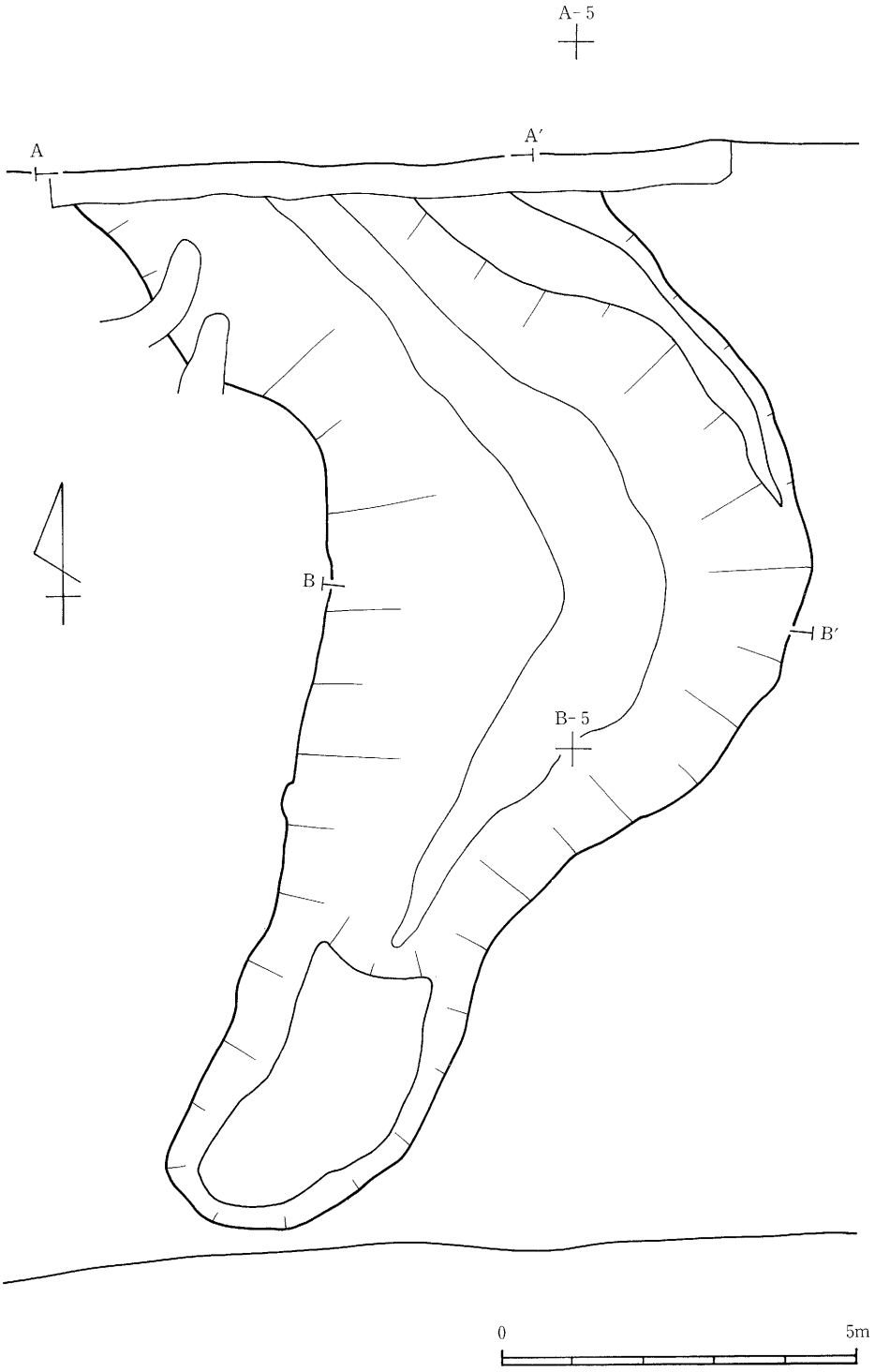
第26図　SD 9 出土遺物

SD11

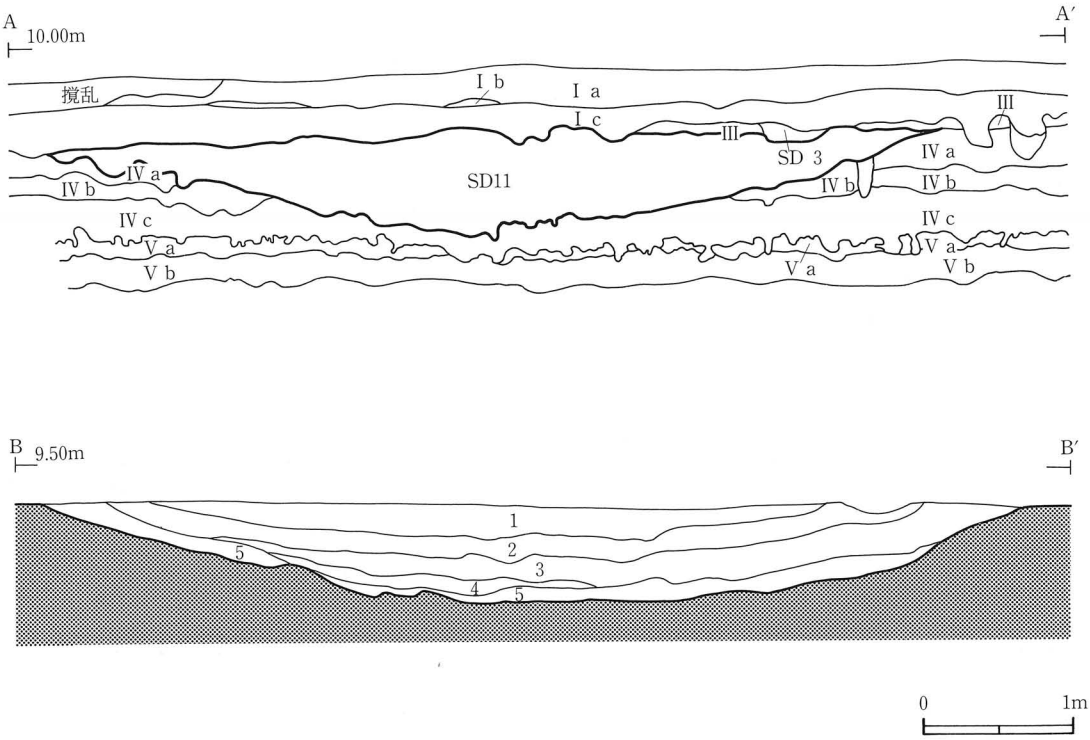
調査区東部A・B-４・５グリッドにかけて検出された。SD ２～５と重複関係にあり、ともに切られていることから遺構はそれらより古い。上端の最大幅は670cm、下端の最大幅は140cm、深さ65cmであり、南北に延び東側にふくれる弧を描く溝である。断面形は皿状をなしており、壁は底面から外方に向かって開いている。確認された堆積土は５層で、いずれも自然堆積層であり、第１層に灰白色火山灰を層下部に層状に含んでいる。出土遺物は、図示できたのが、ロクロ調整で内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている土師器の坏、ロクロ調整の土師器の甕、完形品の石鏃、釘である（第29図、写真41）。他にも土師器の坏や甕、須恵器の坏や

SD11 調査風景

甕が出土している。石鏃については遺構に伴う遺物ではなく混入品と考えられる。南部で徐々に浅くなって途切れ、それより南では確認できず、平面から見ても何のための溝かは不明である。

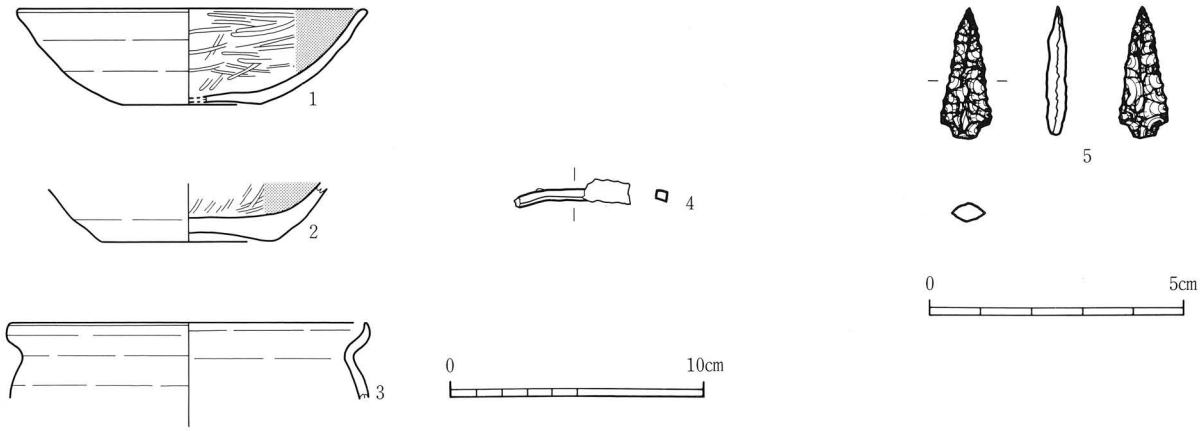


第27図　SD11 平面図



層位	色　　調	性　質	備　　考
1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	灰白色火山灰を層下部に層状に含む。酸化鉄を斑紋状に多量含む。
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	酸化鉄を斑紋状に多量含む。
3	10YR2/1 黒色	粘土	酸化鉄を斑紋状に少量含む。10YR4/4 褐色シルトをブロック状に微量含む。
4	10YR3/1 黒褐色	粘土	10YR4/4 褐色シルト質粘土をブロック状に多量含む。
5	10YR4/4 褐色	粘土	10YR2/2 黒褐色粘土をブロック状に少量含む。

第28図　SD11 断面図



No.	写真図版	遺　構・層　位	種　　別	器種	遺存度	法　量（cm） 口径	底径	器高	底径／口径	色　　調	特　　徴
1	41－1	SD11　l 2	土師器	坏	1/7	(13.8)	(5.4)	3.8	0.39	(外)にぶい黄橙色 (内)黒色	(外)体部ロクロ調整、底部－回転糸切無調整 (内)ヘラミガキ・黒色処理
2	41－2	SD11　l 2	土師器	坏	下部 2/3	?	6.8	?	?	(外)橙色 (内)黒色	(外)ロクロ調整、底部－回転糸切無調整 (内)ヘラミガキ・黒色処理
3	41－4	SD11 l1・2	土師器	甕	上部 1/6	(14.0)	?	?	－	(外)にぶい橙色 (内)にぶい黄橙色	(内・外)ロクロ調整

No.	写真図版	遺　構・層　位	種　　別	遺存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特　　徴
4	41－3	SD11　l 1	鉄製品、釘	両端欠損	(4.6)	0.5	0.4	3.7	
5	41－5	SD11　l 2	石器、石鏃	完形	2.6	1.0	0.4	0.8	有茎式

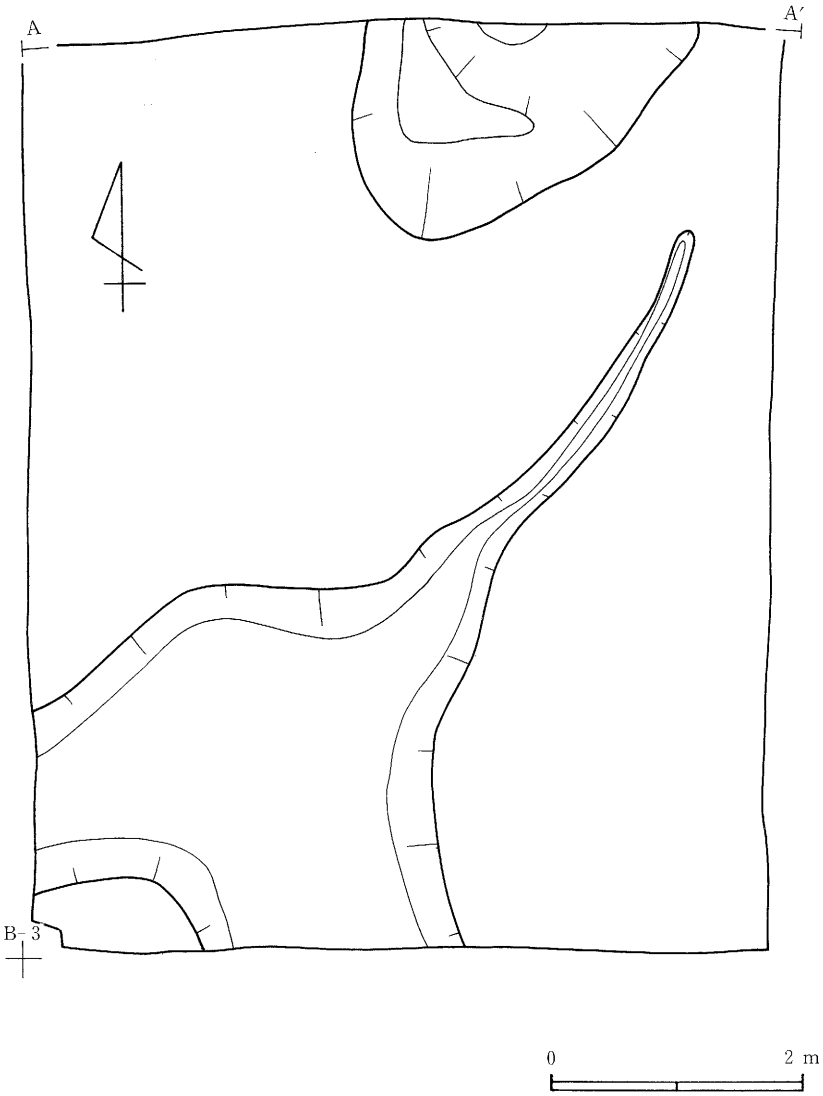
第29図　SD11 出土遺物

第４節　下層の調査

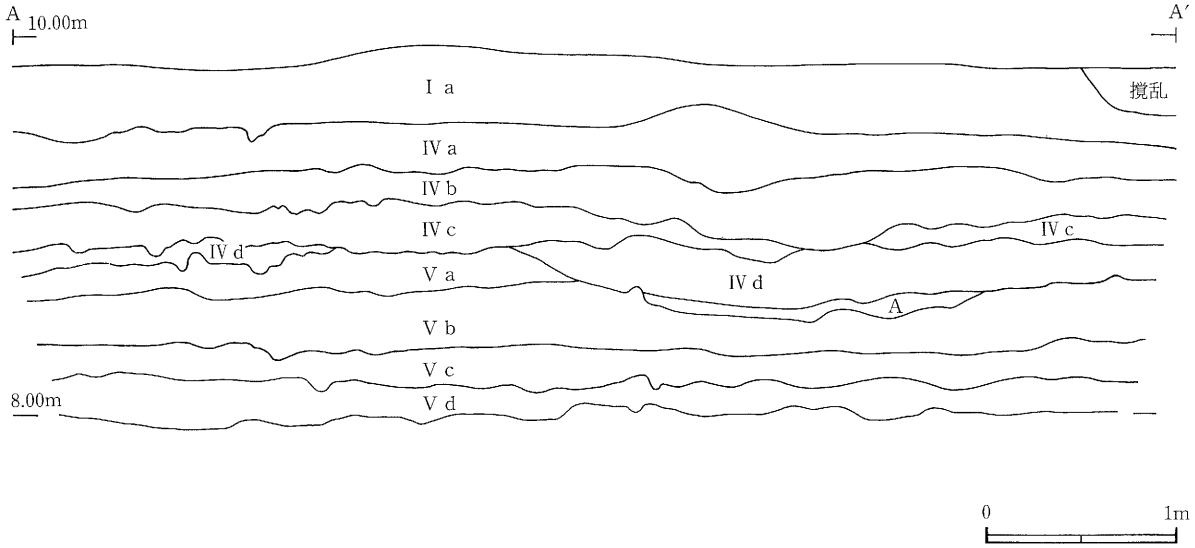
隣接する安久東遺跡の調査では古墳時代の層の下から弥生土器が出土している。このため、当遺跡でも下層の調査を実施することとし、Ⅳａ層上面の調査終了後、A-３・B-４・B-５グリッドに試掘区を設けて掘り下げた。

A-３試掘区は、Ⅳ層中は遺構・遺物は検出されなかった。Ｖａ層上面で土坑状の窪みと溝跡のプランが検出された。土坑状の窪みは深さ約30cmで、人為的なものか自然の窪みかは不明である。第31図のＡ層はこの土坑状の窪みの堆積土である。溝跡は、北東部は上端幅約10cmであるが、南西部で広がりを見せて二股に分かれる。深さは４～５cmである。B-２試掘区を設けてこの溝の延び具合を確認しようとしたが検出できなかった。出土遺物はなく、人為的に掘り込まれた様子もないことから自然流路と考えられる。Ｖｃ層掘り下げ中、遺構は検出できなかったが、縄文土器片47点、石器１点が出土した。第32図１～３は深鉢と推定される。１は口縁部のやや下に横位沈線が巡り、沈線より上部は丁寧なミガキが施されている。２・３は同一個体と推定される。横位平行沈線と縦位の弧状沈線によって区画され、区画内には縄文が充塡されている。また上部の隆帯には連続する刻目が施され、２では隆帯のさらに上方に沈線が認められる。４は無文の浅鉢で、口縁部近くに円孔が穿たれている。５は深鉢の体部である。横位平行沈線と楕円形になると考えられる沈線によって区画され、上部の横位沈線と楕円形の沈線との間には三叉状の短沈線が刻まれている。区画内には縄文が充塡され、三叉状の短沈線の上部には小さな丸瘤が張り付けられている他、下部の横位沈線上にも刻み目が施された大型のボタン状の瘤が張り付けられている。また、この大型の瘤と瘤との間には刻目も認められた。６は石匙であり、長さ4.5cm、幅5.65cm、厚さ8.4cm、重さ14.1gである（第32図、写真41）。なお、その後Ｖｄ層上面まで掘り下げたが遺構は検出できなかった。

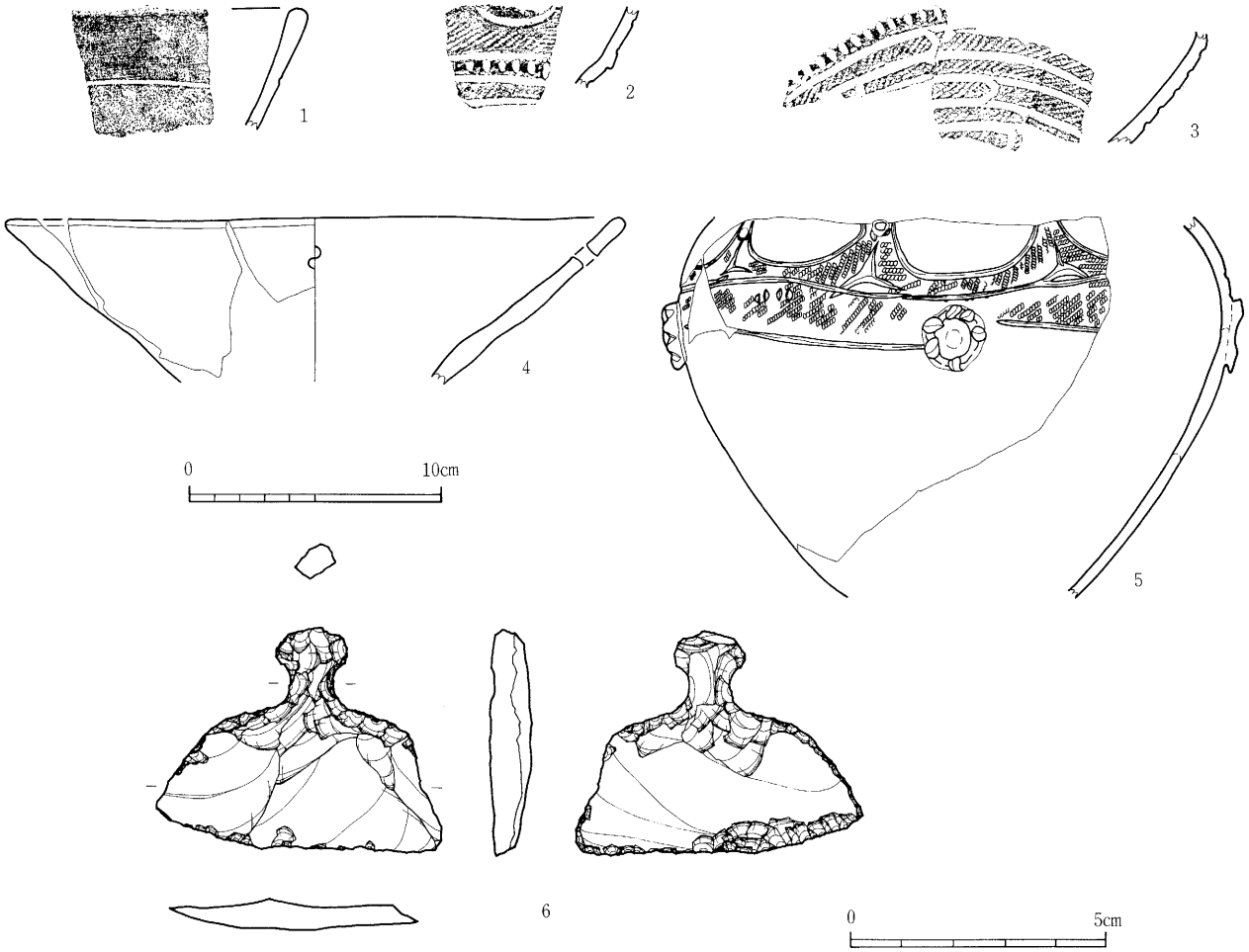
B-４試掘区・B-５試掘区でⅥ層上面まで掘り下げたが遺構は検出できなかった。断面観察をすると、Ⅳｃ層とⅣｄ層の下面の凹凸が激しく耕作土の可能性も考えられるため、B-５試掘区でⅣａ層～Ｖｄ層のプラント・オパール分析を行ったが、イネのプラント・オパールは検出されなかった（第３章参照）。B-５試掘区Ｖｂ層で遺構は検出できなかったが、磨滅しているため詳しくはわからないが縄文の施された土器片が20点出土した。



第30図　A-３試掘区Ｖａ層上面平面図



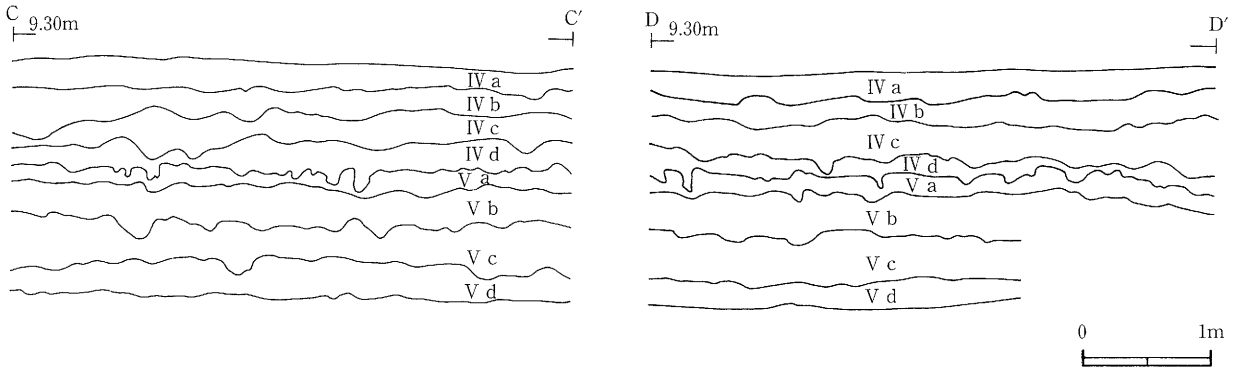
第31図　A-３試掘区断面図



No.	写真図版	出土地点・層位	種　別	器 種	遺存度	法　量　(cm)			色　　調	特　　徴
						口径	底径	器高		
1	42－1	A－３深掘区　ⅤC層	縄文土器	深鉢	口縁小片	?	?	?	(外)褐灰色(内)黒色	沈線
2	42－4	A－３深掘区　ⅤC層	縄文土器	深鉢	体部小片	?	?	?	(外)灰黄褐色(内)黒褐色	沈線、隆帯に連続する刻目
3	42－2	A－３深掘区　ⅤC層	縄文土器	深鉢	体部小片	?	?	?	黒褐色	沈線、隆帯に連続する刻目
4	42－3	A－３深掘区　ⅤC層	縄文土器	浅鉢	1/5	(24.0)	?	?	褐灰色	ヘラミガキ
5	42－5	A－３深掘区　ⅤC層	縄文土器	深鉢	体部1/4	?	?	?	褐灰色～灰黄褐色	沈線、丸瘤、ボタン状瘤

No.	写真図版	出土地点・層位	種　別	遺存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特　　徴
6	42－6	A－３深掘区　ⅤC層	石器、石匙	完形	4.5	5.65	8.4	14.1	

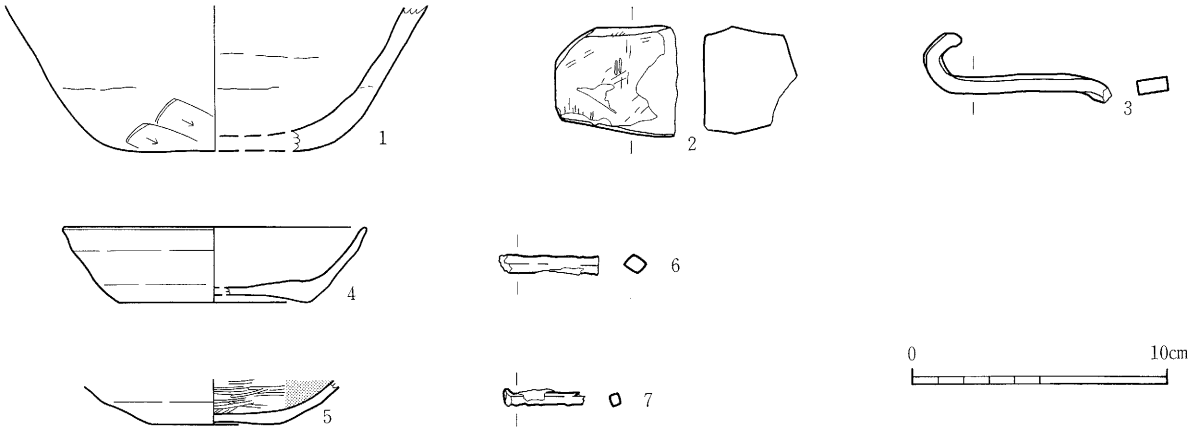
第32図　A-３試掘区出土遺物（ⅤC層）



第33図　B-4 試掘区断面図（第４図参照）

第５節　その他の出土遺物

Ⅰ・Ⅱ層の遺物については、Ⅰ・Ⅱ層の大部分を重機で除去したため取り上げた遺物はごく一部であると考えられる。出土層位もⅠ・Ⅱ層を厳密に区別しなかったため、平面的、層別の分布状況は不明である。出土遺物は、図示できたのが外面は磨滅しているが一部ヘラケズリで内面はナデが施されている土師器の甕、端部欠損している砥石であるが、他にロクロ調整の土師器の坏・甕・瓶、土師質土器、堤・相馬・美濃などの陶器、瓦、あまり遺存度のよくない鉄製品などが多数出土している。Ⅲ層の出土遺物は、図示できたのが用途不明の鉄製品であるが、他に磨滅しているがロクロ調整の土師器の甕、陶器が出土している。Ⅳａ層の出土遺物は、図示できたのが、底部の切り離しは回転糸切りでその後ロクロで再調整された土師質土器、外面はロクロ調整で内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている土師器の坏、釘であるが、他にも、ロクロ調整や非ロクロ調整の土師器の坏や甕、須恵器の坏・甕・瓶、堤・相馬の陶器などが出土している。



No.	写真図版	出土地点・層位	種　別	器種	遺存度	法量(cm) 口径	底部	器高	色調	特徴
1	43－1	北部　Ⅰ・Ⅱ層	土師器	甕	底部1/3	?	(7.0)	?	にぶい橙色	(外)？(磨滅)、一部ヘラケズリ　(内)ナデ

No.	写真図版	出土地点・層位	種　別	遺存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴
2	43－2	西部　Ⅰ・Ⅱ層	石製品、砥石	端部欠損	(4.8)	4.3	(3.6)	101.5	
3	43－3	B－1　Ⅲ層	鉄製品、用途不明	端部欠損	(7.3)	0.6	1.2	36.5	

No.	写真図版	出土地点・層位	種　別	器種	遺存度	法量(cm) 口径	底部	器高	色調	特徴
4	43－7	西部　Ⅳ層上面	土師質土器	小皿	1/3	(11.8)	7.3	3.0	橙色	(内・外)ロクロ調整、底部回転糸切後ロクロ調整
5	43－6	西部　Ⅳ層上面	土師器	坏	底部のみ	?	5.0	?	(外)にぶい黄橙色 (内)黒色	(外)ロクロ調整、底部回転糸切 (内)ヘラミガキ・黒色処理

No.	写真図版	出土地点・層位	種　別	遺存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴
6	43－4	西部　Ⅳ層上面	鉄製品、釘	両端欠損	(3.9)	0.7	0.8	2.8	
7	43－5	西部　Ⅳ層上面	鉄製品、釘	端部欠損	(3.2)	0.5	0.5	1.7	

第34図　その他の出土遺物

第３章　プラント・オパール分析

仙台市、安久遺跡におけるプラント・オパール分析

古環境研究所

１．はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出し、その組成や量を明らかにする方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

安久遺跡の発掘調査では、土層断面の観察において複数の層位で水田耕作層の可能性が推定された。そこで、稲作跡の探査を目的にプラント・オパール分析を行うことになった。

２．試　　料

調査区の土層は、下位より灰黄褐色粘土（Ⅵ層）、黒褐色粘土（Ｖｄ層）、暗褐色粘土（Ｖｃ層）、黒褐色粘土（Ｖｂ層）、黒褐色粘土（Ｖａ層）、褐色砂質シルト（Ⅳｄ層）、暗褐色粘土質シルト（Ⅳｃ層）、暗褐色粘土質シルト（Ⅳｂ層）、にぶい黄褐色砂質シルト（Ⅳａ層）、黒褐色粘土質シルト（Ⅲ層）に分層された。

分析試料は、Ⅳａ層～Ｖｄ層において計８点が採取された。

４．分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

１）試料土の絶乾（105℃・24時間）、仮比重測定

２）試料土約１ｇを秤量、ガラスビーズ添加（直系40μm、約0.02g）

※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量

３）電子炉灰化法による脱有機物処理

４）超音波による分散（300W・42Khz・10分間）

５）沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥

６）封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成

７）検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料１ｇ中のプラント・オパール個数（試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算計数(機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）を乗じて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。換算計数は、イネは赤米（2.94、種実重は1.03)、キビ族はヒエ（8.40)、ヨシ属はヨシ（6.31)、ウシクサ族はススキ（1.24)、タケ亜科については数種の平均値（0.48）を用いた（杉山・藤原、1987）

４．分析結果

プラント・オパール分析の結果を表３に示した。稲作跡の探査が主目的であるため、同定は、イネ、キビ族（ヒ

エなどが含まれる)、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる）の主要な５分類群を中心に行った。

採取された試料すべてについて分析を行った結果、ヨシ属、ウシクサ族、タケ亜科の各分類群のプラント・オパールが検出された。このうち、ヨシ属はＶｂ層、Ｖｃ層、Ｖｄ層で検出された。密度はいずれも低い値である。ウシクサ族はすべての層位より検出された。Ｖｄ層で比較的高い以外はいずれも低い密度である。タケ亜科もすべての層位より検出された。Ⅳａ層、Ⅳｂ層、Ｖａ層、Ｖｂ層では比較的高い値である。

５．考　　察

本遺跡では、イネのプラント・オパールはいずれの試料からも検出されなかった。したがって、本調査地点に関しては分析を行ったいずれの層位についても稲作の痕跡は認められない。

なお、各層位ともタケ亜科が優勢であり、ヨシ属は低密度あるいは未検出である。このことから、本遺跡一帯はＶｄ層堆積時からⅣａ層堆積時に至るまで概ね乾いた環境であったと推定される。

６．ま と め

安久東遺跡においてプラント・オパール分析を行い稲作跡の探査を試みた。その結果、いずれの層位においても稲作の可能性は認められなかった。

文　献

杉山真二・藤原宏志（1987）川口市赤山陣屋遺跡におけるプラント・オパール分析．赤山－古環境編－．川口市遺跡調査会報告，10，p.281-298.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，９，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（５）－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p73-85.

検出密度（単位：×100個ｇ）

分類群／試料	Ⅳａ	Ⅳｂ	Ⅳｃ	Ⅳｄ	Ⅴａ	Ⅴｂ	Ⅴｃ	Ⅴｄ
イネ								
キビ族								
ヨシ属						6	12	13
ウシクサ族（ススキ属など）	13	7	6	7	6	6	12	33
タケ亜科（おもにネザサ節）	179	113	88	73	141	101	87	91

推定生産量（単位：kg/m²・cm）

イネ								
(イネ籾)								
キビ族								
ヨシ属						0.40	0.73	0.82
ウシクサ族（ススキ属など）	0.16	0.08	0.08	0.08	0.07	0.08	0.14	0.40
タケ亜科（おもにネザサ節）	0.86	0.54	0.42	0.35	0.68	0.49	0.42	0.44

表３　安久遺跡のプラント・オパール分析結果

第４章　まとめ

Ⅰ．遺物について

今回の調査では各遺構および基本層から縄文土器・土師器・赤焼土器・須恵器・土師質土器・陶器・磁器・瓦・石器・石製品・金属製品・木製品などの遺物が2,597点出土しているが（表４）、確実な共伴関係が判るものはなく、図化できたものも少ないため年代が確定できるものがほとんどない。ここでは縄文土器についてのみ簡単に触れておきたい。

基本層Ⅳａ・Ⅳｂ・Ⅴｂ層中およびSD ８から出土したものは磨滅しているため詳細は不明である。なお、SD ８の年代は中世と考えられるため（後述する）SD ８から出土したものについては周辺からの流れ込みと考えられる。図化できたのはⅤｃ層から出土した破片のうちの５点で、深鉢と考えられるものが４点、浅鉢が１点である。前章と一部重複するが、深鉢と考えられる個体（第32図２・３と５）について特徴をとまめると以下のようになる。

第32図２・３　①文様帯が沈線で区画される。
　　②隆帯に連続する刻目が施される。
第32図５　　③小さな瘤状の張り付けと大形で装飾性のあるボタン状の張り付けがある。
　　④三叉状の沈線が刻まれている。

これらの土器は「瘤付土器」と呼ばれる範疇に入るものである。瘤付土器については田柄貝塚や福島県三貫地貝塚などからまとまった資料が出土しているので比較してみたい。

田柄貝塚との比較

①～④の特徴は田柄貝塚では第Ⅶ群土器に相当する。田柄貝塚では晩期の第Ⅷ群土器との時期差が層位的にも確認されている。

三貫地貝塚との比較

②の刻目文は三貫地貝塚の深鉢ＡⅤ類③、④の三叉文は三貫地貝塚の深鉢ＡⅦ類に相当し、いずれも縄文時代後期後葉の土器群とされている。三貫地貝塚では後期後葉の深鉢を第１～第５段階に細分し、深鉢ＡⅤ類③は第４段階後半、深鉢ＡⅦ類は第５段階のものとしているので、今回出土した土器群は大体三貫地貝塚の第４段階後半～第５段階にかけての時期に比定されよう。

なお、三貫地貝塚の第５段階は田柄貝塚第Ⅶ群土器とほぼ同時期と推定されているのでこのことと今回の出土遺物の時期的関係も矛盾しない。

Ⅱ．遺構について

検出した遺構は溝（SD １～11）とピット（P １～22）のみであるが、このうち溝については切り合い関係から次の４段階に分けることができる。

第１段階

他の遺構より古い。（SD ９・11）

第２段階

SD ９より新しいが、その他の遺構よりは古い。（SD ８）

第３段階

SD ８・９・11よりも新しい。（SD １～４・７・10）

第４段階

最も新しい。（SD ５・６）

種別 器種 / 層・遺構		縄文土器	縄文or弥生土器	土師器		赤焼土器		須恵器					土師質土器	土師質土器？	陶器									磁器			瓦	石器			石製品	鉄製品				銅製品	木製品			窯	粘土	計
				坏	甕	坏	不明	坏	甕	瓶	鉢	不明			在地	堤	相馬	岸窯系？	東海	常滑	美濃	肥前	不明	肥前	中国	不明		石鏃	石匙	剝片	砥	釘	刀子？	鎌？	不明	銅銭	漆器	橋脚	用途不明	壁	土塊	
基 I・II				41	127			2	2	2			13	1		10	14	2			1		14	4			2				2	7	1	1	2							248
基 III					10																		1											1								12
基 IV	a	1		26	85			1	6	2			15			2	5					1	2	1								2										149
基 IV	b		2																																							2
基 V	b		20																																							20
基 V	c	47																											1	2												50
S D	1			3	9		2	1		1							1																									17
S D	4				1																																					1
S D	5			1	2																		1																			4
SD6	ℓ1			1	4								16										1																			21
	ℓ2			3	19				1				2																						1							27
SD8	上層			146	328	1		1	7	6		2	30							1																1						523
	下層	8		291	424	10	4	32	108	7	1	2	12		2				1						1		1										1	1	1		1	908
SD9	ℓ1			1	10							1																														12
	ℓ2			6	24					1																1																32
S D	10			2	2					1			2																													7
SD11	ℓ1			35	29			1	1																																	66
	ℓ2～5			16	45																							1				1										63
P	10				1																		11																			1
攪乱				3	34	1		2	2				2	2		51	9							1			309							2					2		431
層不明				1	1					1													30																			3
計		56	22	576	1155	12	6	40	127	21	1	5	92	3	2	63	29	2	1	1	1	1		6	1	1	312	1	1	2	2	10	1	1	5	1	2	1	1	2	1	2597
		78		1731		18		194					95		130									8			312	4			2	17				1	4			2	1	

表4　破片集計表

これらの遺構から出土した遺物のうち年代がある程度確定できるものは以下のとおりである。

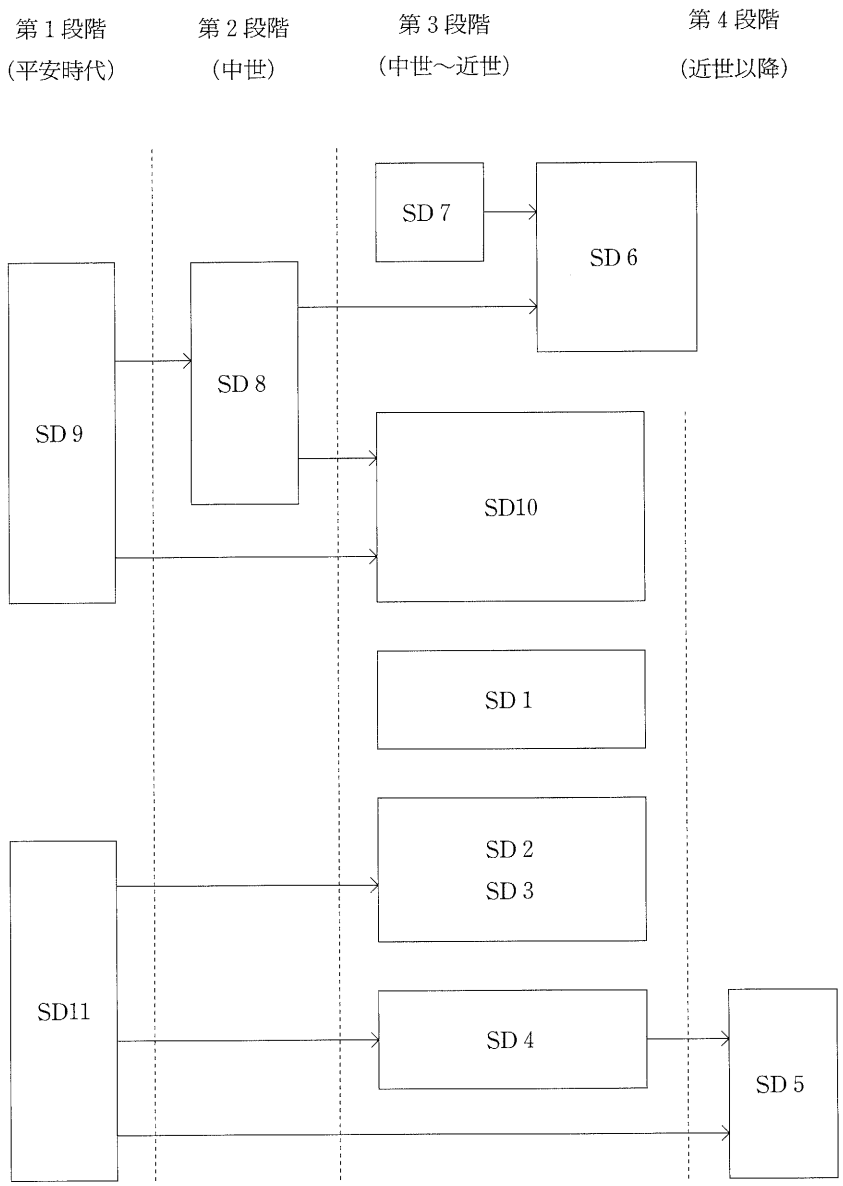
SD 9・11　ロクロ調整の土師器坏、同甕（平安時代）

SD 8　　龍泉窯系　青磁碗（中世）

SD 6　　土師質土器皿（中世後半～近世）

年代が確定できる遺物が極めて少ないため時期を絞り込むことはできないが、遺構の方向性や切り合い関係、遺物の年代からすると各遺構は第35図のような変遷が考えられる。なおピットについては性格も不明で、遺物もほとんど無いため時期は不明である。

第36図に当遺跡第１次調査区と隣接する安久東遺跡を含めた遺構の略図を示した。これによればSD 1とSD 3はそれぞれ北に延びることが確認され、SD 9は第１次調査区で第１号溝とした「コ」字状に巡る溝につながる可能



第35図　遺構変遷図

性がある。なお、今回調査したSD 8は規模が大きいことから安久東遺跡で確認されているような中世の堀跡かあるいは基幹水路と考えているが、安久東遺跡との直接の関係については明らかではない。

Ⅲ．ま　と　め

調査の結果、Ⅳａ層上面で溝跡11条、ピット22基を検出した他、遺構は検出できなかったがⅤｃ層中から縄文土器と石器が出土した。前の記述と重複する部分もあるが、調査成果および問題点を整理すると以下のようになる。

1．Ⅴｃ層中から縄文時代後期後葉の土器、石器が出土した。当遺跡周辺の縄文時代後期の遺跡は名取川の北岸の六反田遺跡、下ノ内浦遺跡、伊古田遺跡、郡山遺跡などのように自然堤防上に立地する例が多く認められ、当遺跡も同様のありかたを示しているといえる。また当遺跡の西側の高舘丘陵に位置する金剛寺貝塚は、後期後葉の「金剛寺式」の標識遺跡でもあり、当遺跡との関連も予想される。

2．Ⅳｃ層・Ⅳｄ層の下面の凹凸が激しく、耕作土である可能性が考えられたためプラント・オパール分析を行ったが、イネのプラント・オパールは検出されなかった。

3．平安時代の溝跡２条が検出されたが、このうち１条は第１次調査検出の溝につながる可能性がある。全容は不明ながらも平安時代の集落が南側にも広がることが確認された。

4．中世の堀跡あるいは基幹の水路と考えられる大規模な溝跡を検出した。また、橋脚らしい材やピットも確認している。安久東遺跡との直接の関係は不明であるが、何らかのつながりは予想されよう。

5．上記の溝跡から多量の川原石が須恵器片と共に出土した。安久東遺跡でも同様の状況が認められており、古墳が中世頃の土木工事によって破壊された可能性が指摘されている。断定はできないが、当遺跡でも同様のことが予想される。

引用・参考文献

伊東信雄他　1975『安久遺跡発掘調査略報』仙台市中田第一土地区画整理組合

岩淵康治・田中則和『安久東遺跡発掘調査概報』仙台市文化財調査報告書第10集　仙台市教育委員会

氏家和典　1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

太田昭夫　1994『中田南遺跡』仙台市文化財調査報告書第182集　仙台市教育委員会

岡田茂弘・桑原滋郎　1974「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所

加藤孝他　1986『宮城県仙台市安久東遺跡』埋蔵文化財発掘調査研究所報告書第２集　埋蔵文化財調査研究所

木村浩二　1993「安久遺跡」『年報14』仙台市文化財調査報告書第176集　仙台市教育委員会

庄子貞雄・山田一郎　1980「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城市－昭和54年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡研究所

紫桃正隆　1973『史料仙台領内古城・館』宝文堂

白鳥良一　1980「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所

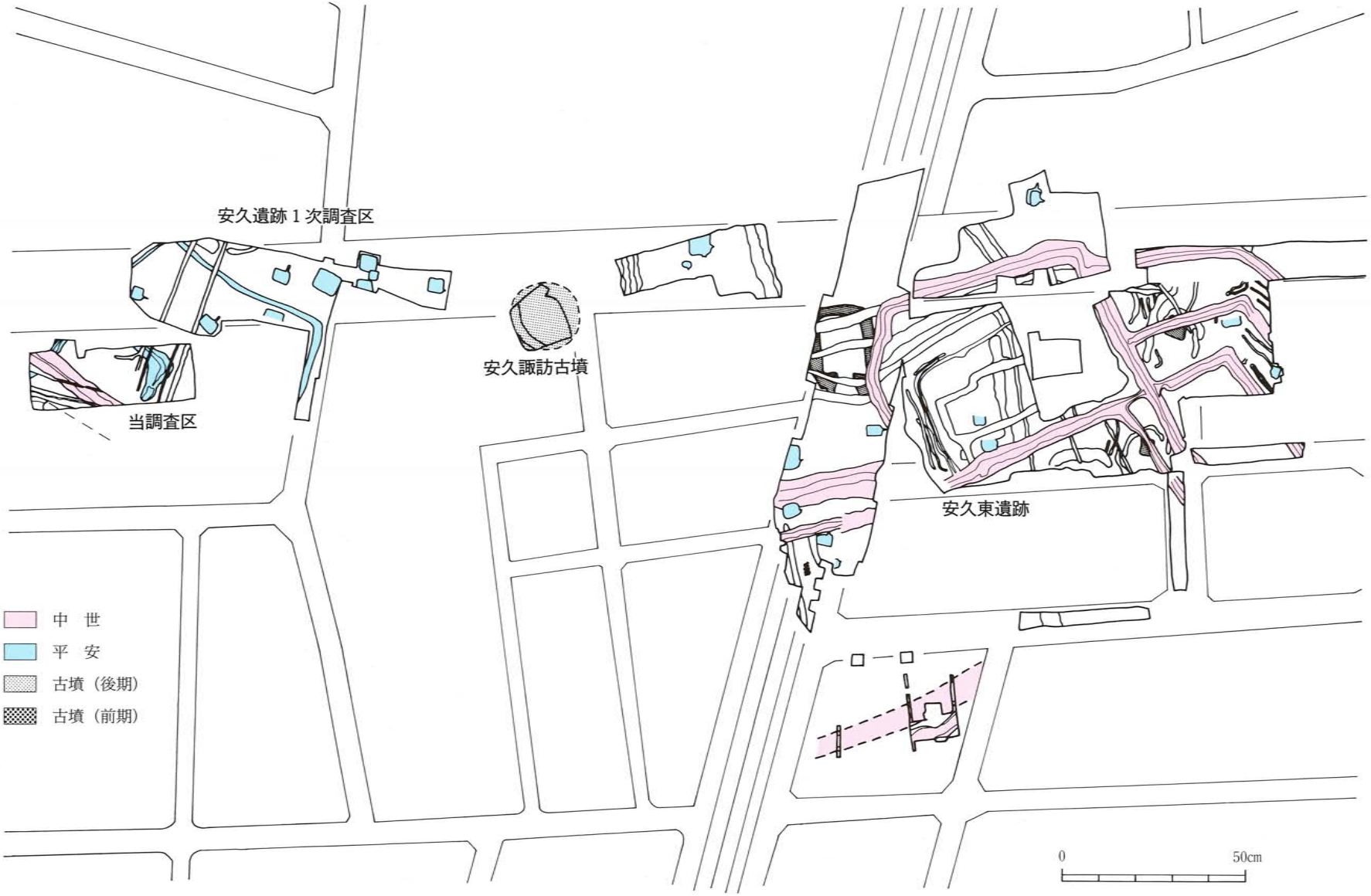
仙台市史編纂委員会　1995『仙台市史　特別編２　考古資料』仙台市

竹田幸司　1997「安久遺跡（４次調査）」『高柳遺跡他発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第223集　仙台市教育委員会

土岐山武　1980「安久東遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第72集　宮城県教育委員会

丹羽　茂他　1981「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第77集　宮城県教育委員会

平間亮輔　1993『安久東遺跡－第３次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第174集　仙台市教育委員会



第36図　安久遺跡・安久東遺跡遺構全体図（略図）

写　真　図　版

写真 1
基本層序（1）

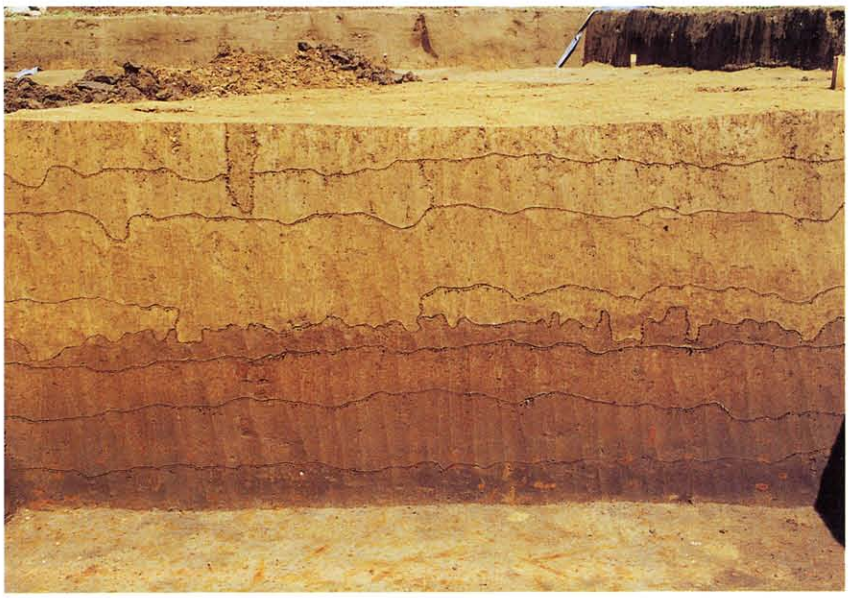


写真 2
基本層序（2）

写真 3
調査風景

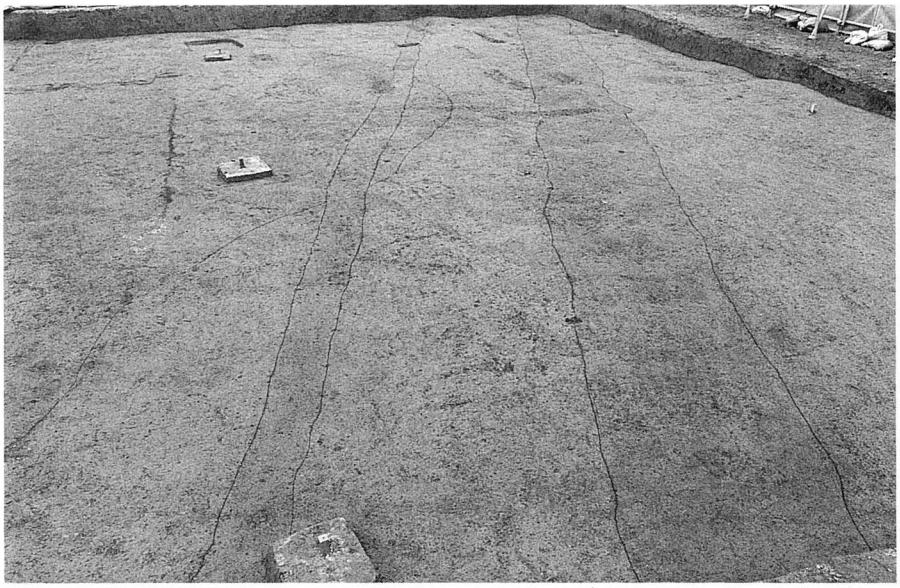


写真 4
SD 1・2 確認状況（南から）

写真 5
SD 1・2 完掘状況（南から）

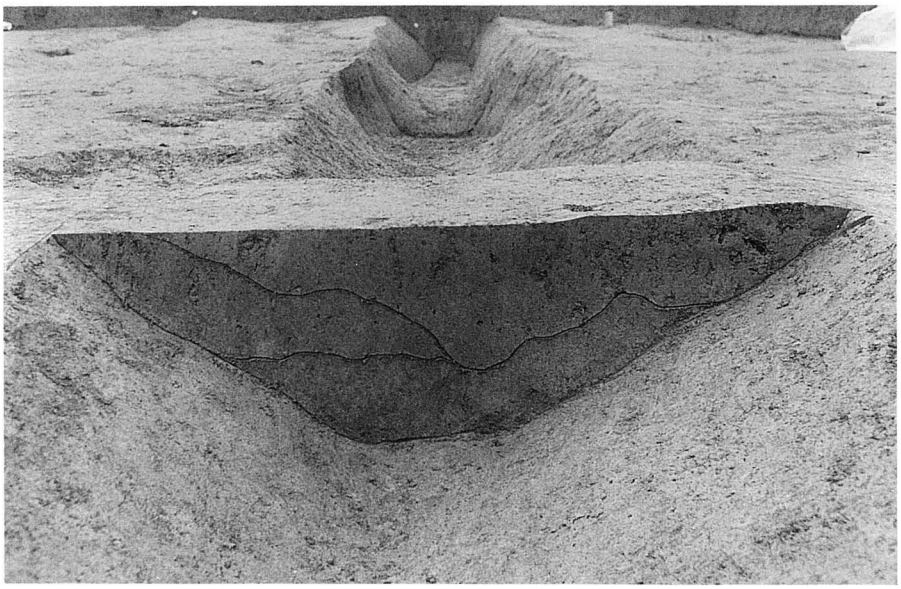


写真 6
SD 1 断面（南から）

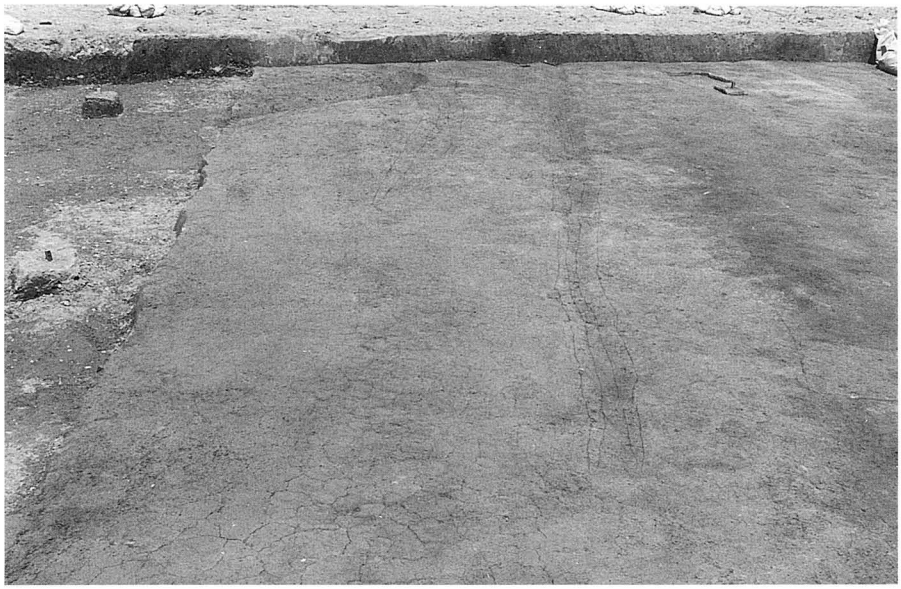


写真 7
SD 3 ～ 5 完掘状況（南から）

写真 8
SD 5 完掘状況（西から）

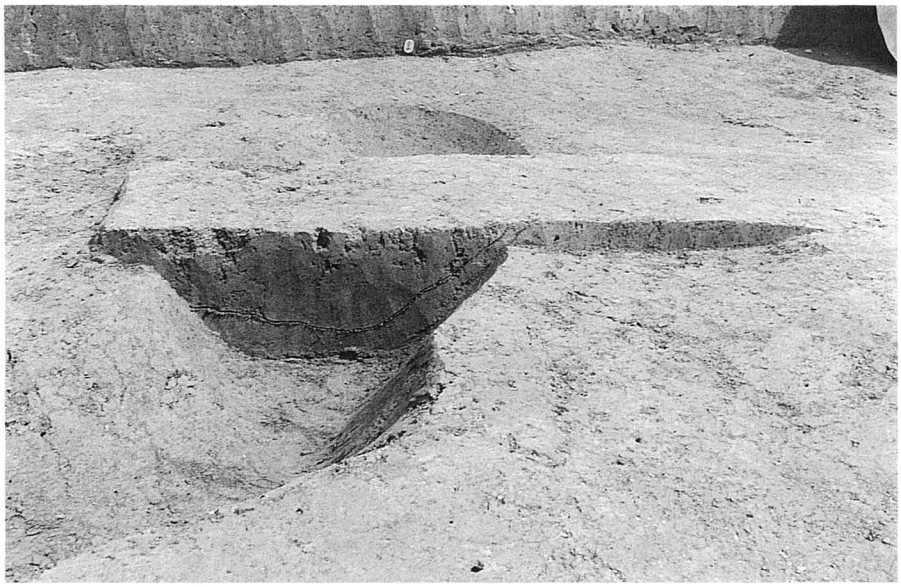


写真 9
SD 4 ・ 5 断面（南から）

写真10
SD 6確認状況（東から）

写真11
SD 6完掘状況（東から）

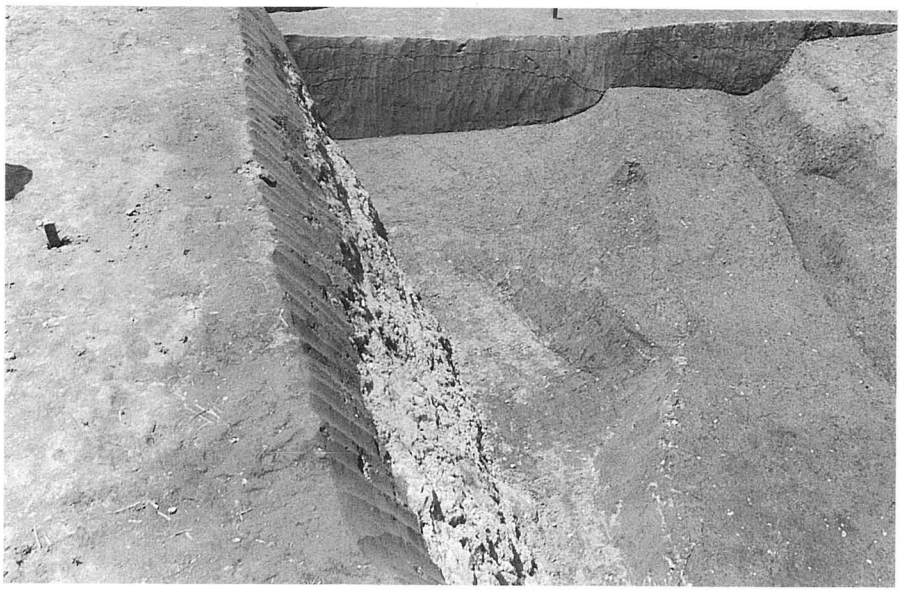


写真12
SD 7完掘状況（東から）

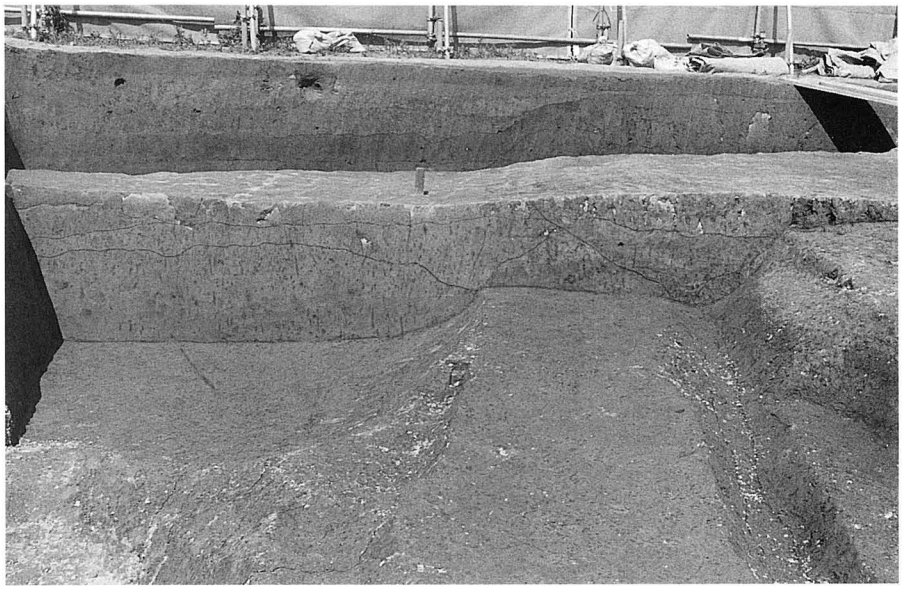


写真13
SD 6・7断面（東から）

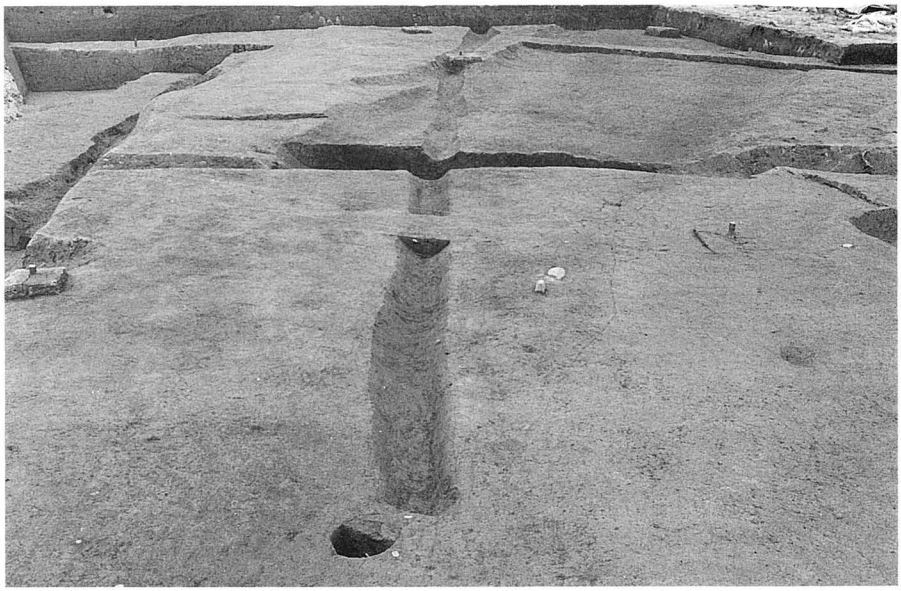


写真14
SD10 完掘状況（東から）

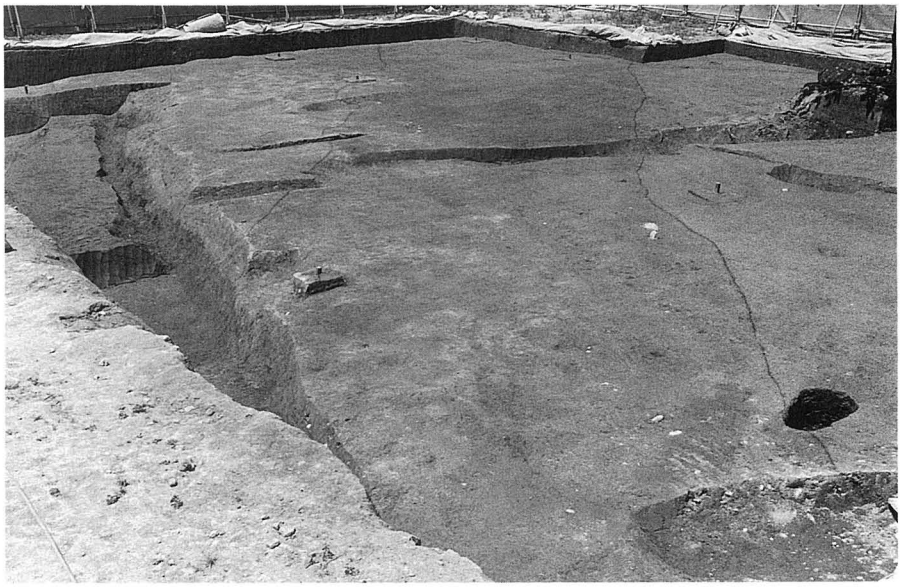


写真15
SD 8 確認状況（南東から）

写真16
SD 8 調査風景（南東から）
－堆積土上層を除去した状況－

写真17
SD 8 調査風景（南東から）
－堆積土中層を除去した状況－

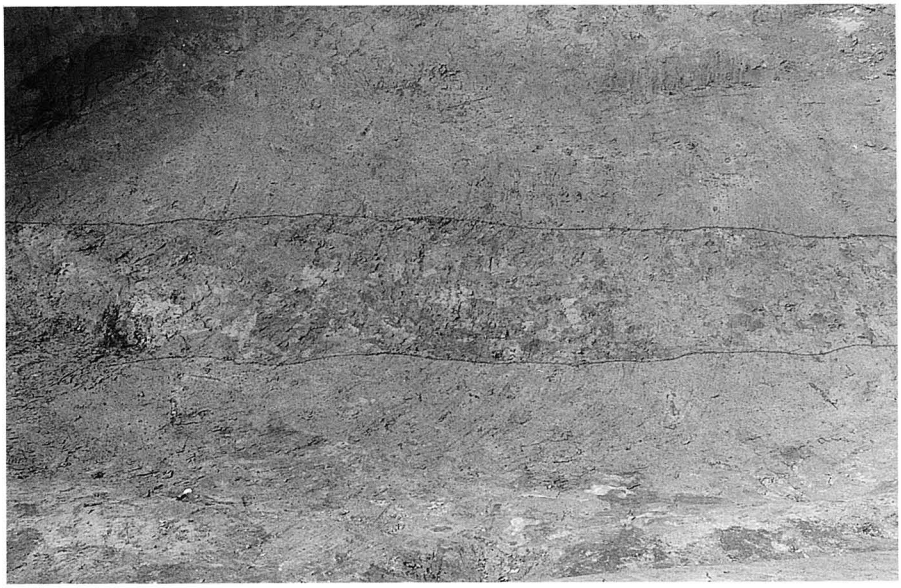


写真18
SD 8 底面
－溝状の窪みの確認状況－

写真19　SD 8完掘状況（南東から）

写真20　SD 8橋脚ピット（西から）

写真21　SD 8橋脚ピット（東から）

写真22　SD 8漆器椀出土状況

写真23　SD 8出土の河原石

写真24
SD 8断面〔B-B′〕

写真25
SD 8断面〔C-C′〕

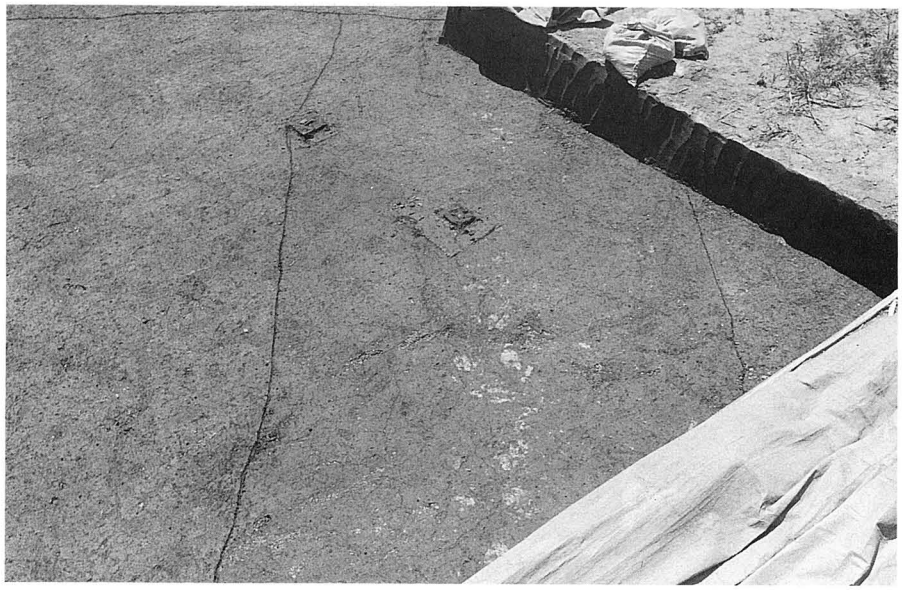


写真26
SD 9確認状況（北東から）

写真27
SD 9 完掘状況（南西から）

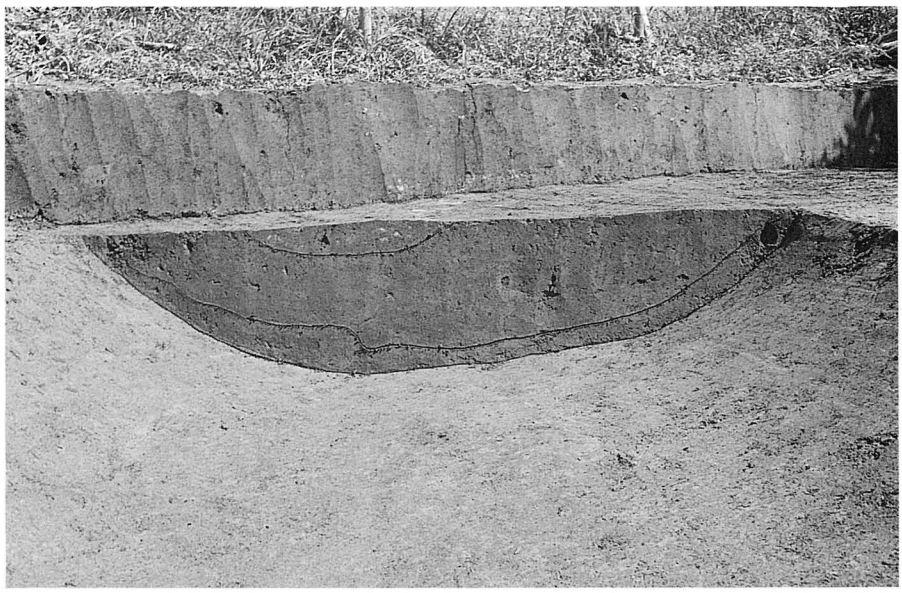


写真28
SD 9 断面（南西から）

写真29
SD11 確認状況（南から）

写真30
SD11 完掘状況（南から）

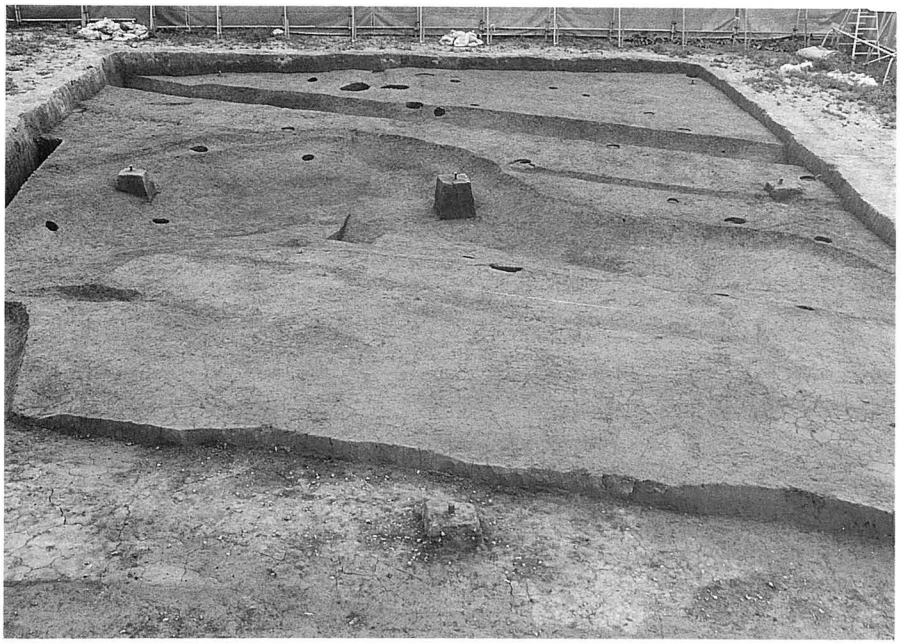


写真31
SD11 完掘状況（西から）

写真32
SD11 断面（南から）

写真33
A-3 試掘区
Ⅴa 層上面検出状況
（東から）

写真34
A-3 試掘区
Ⅴc 層中遺物出土状況
（南から）

写真35
B- 4 試掘区
Ⅴa 層上面検出状況（南から）

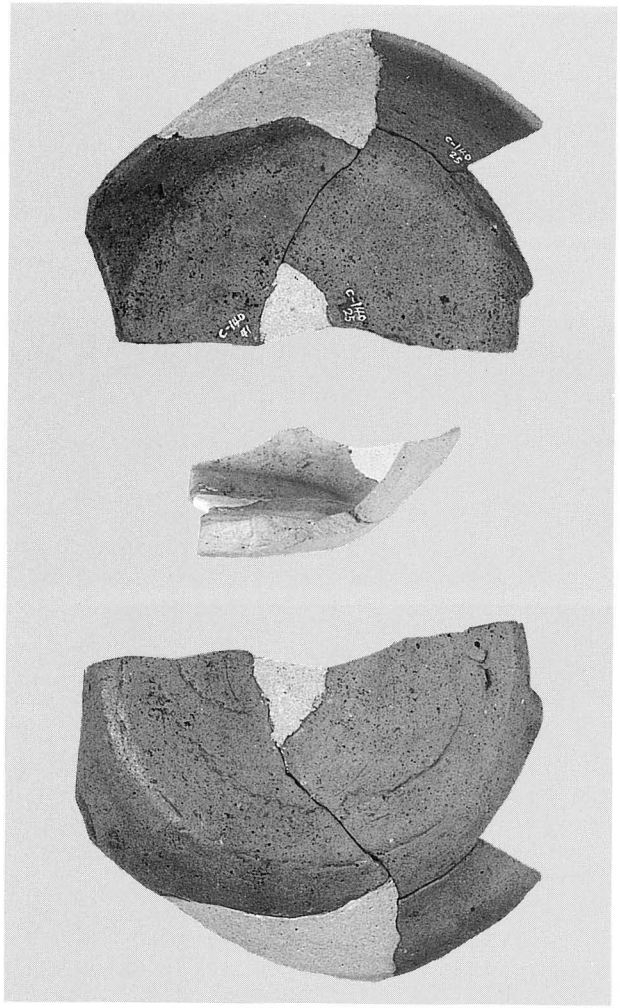


写真36　SD 6 出土遺物（土師質土器・小皿）

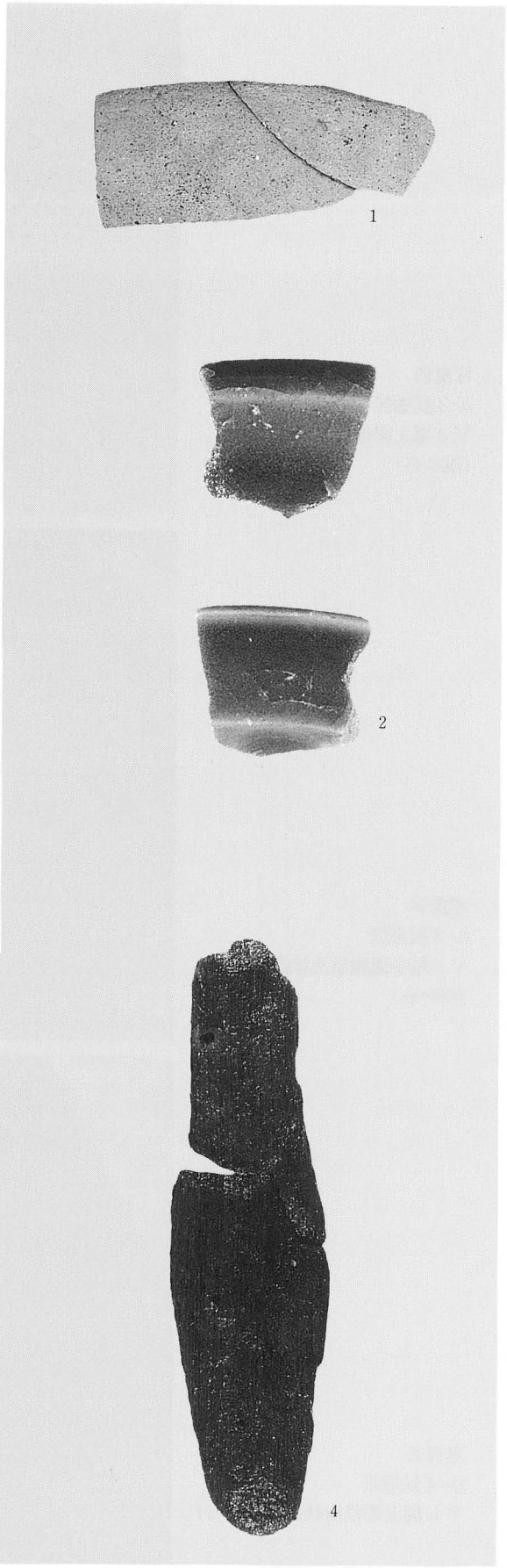


写真37　SD 8 出土遺物（1）
（1.土師質土器・小皿、2.磁器皿、3.須恵器鉢、4.用途不明木製品）

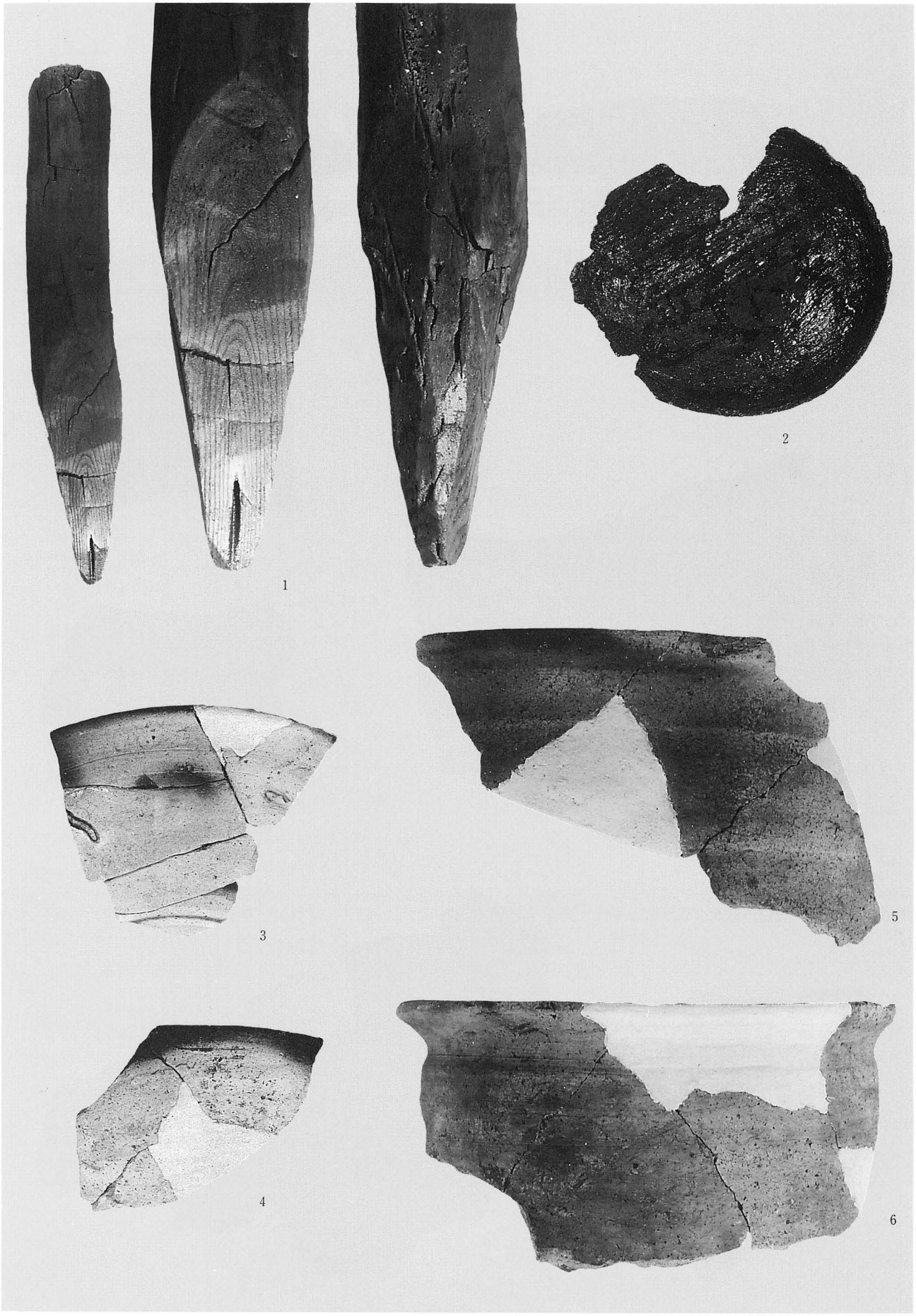


写真38　SD 8 出土遺物（2）

（1.橋脚杭、2.漆器椀、3・4.土師器・坏、5・6.同甕）

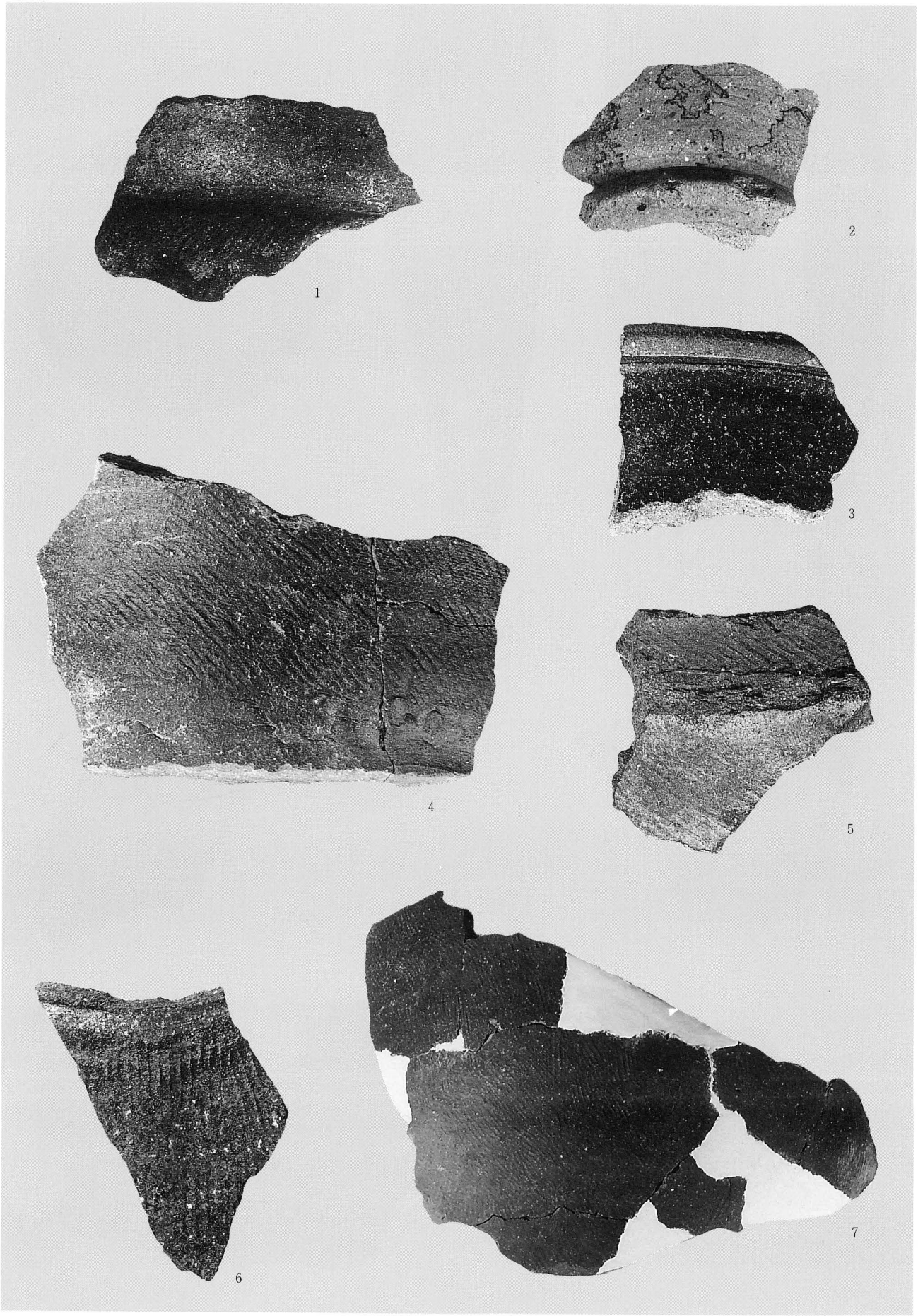
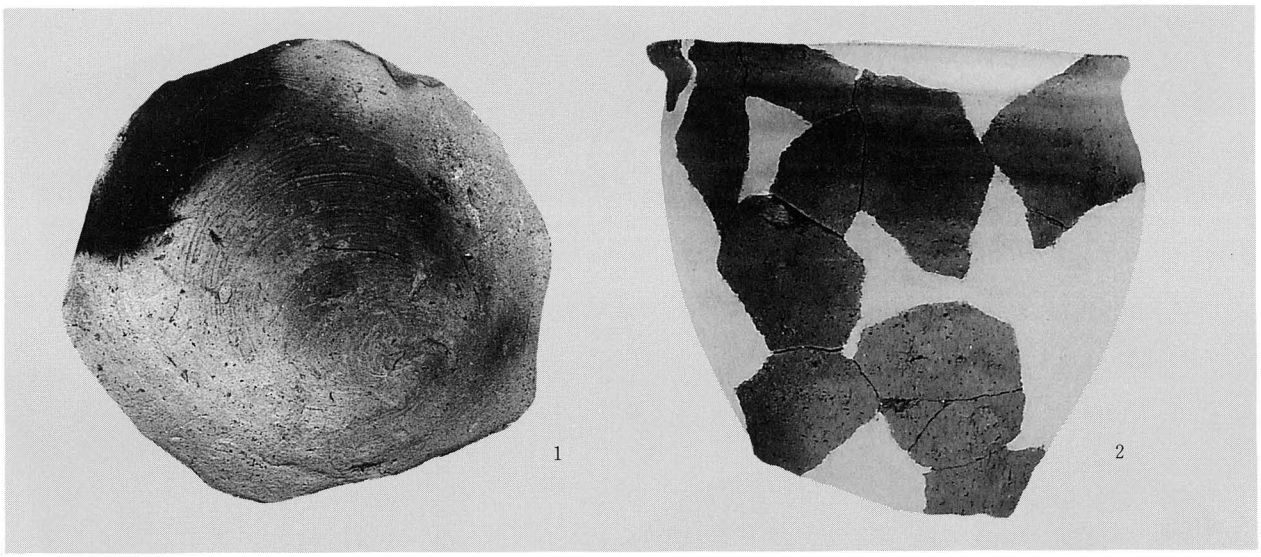


写真39　SD 8出土遺物（3）
（1.縄文土器・深鉢、2.須恵器・長頸瓶、3～7.同甕）



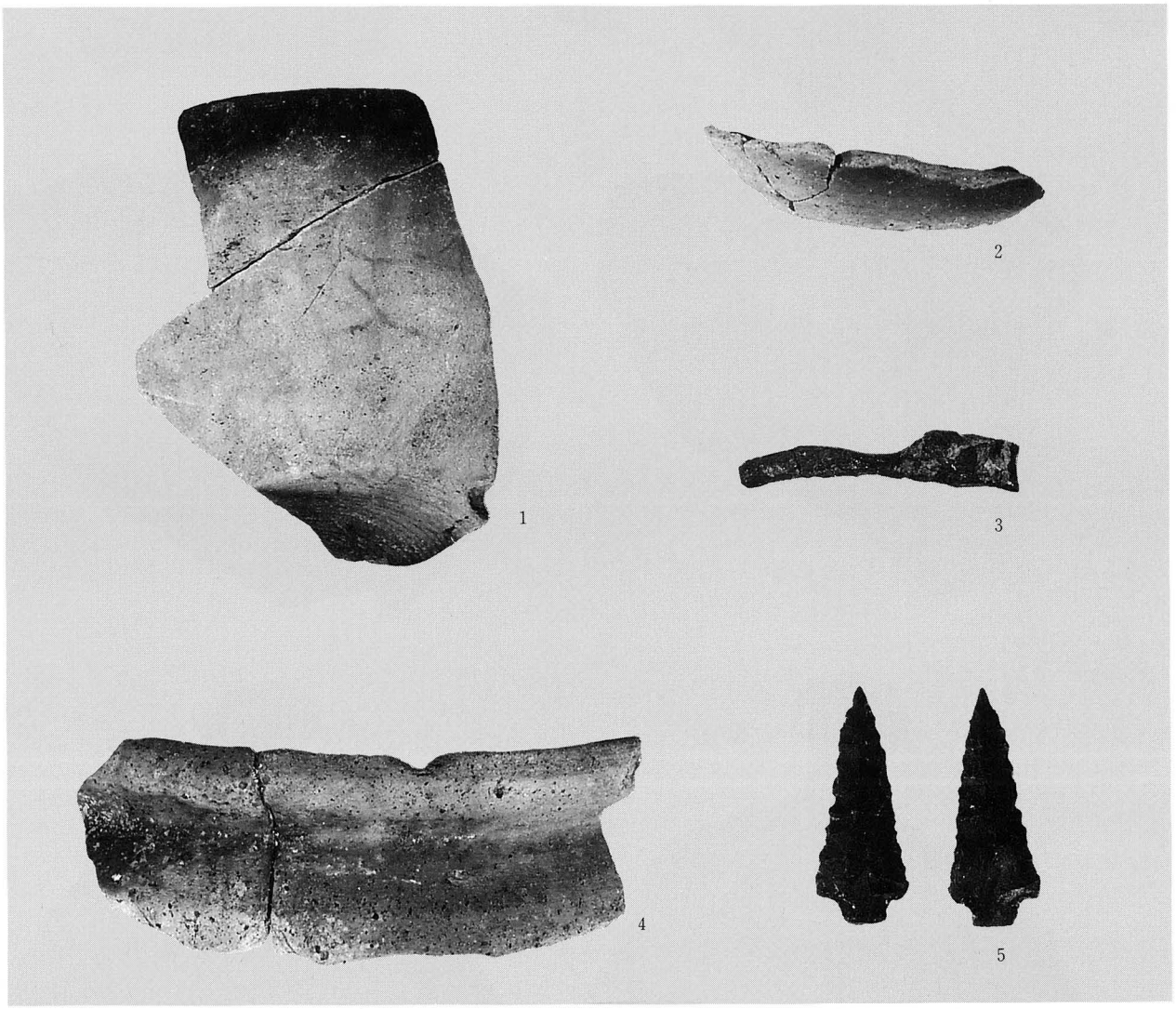


写真41　SD11 出土遺物

（1・2.土師器・坏、3.鉄製品・釘、4.土師器・甕、5.石器・石鏃）

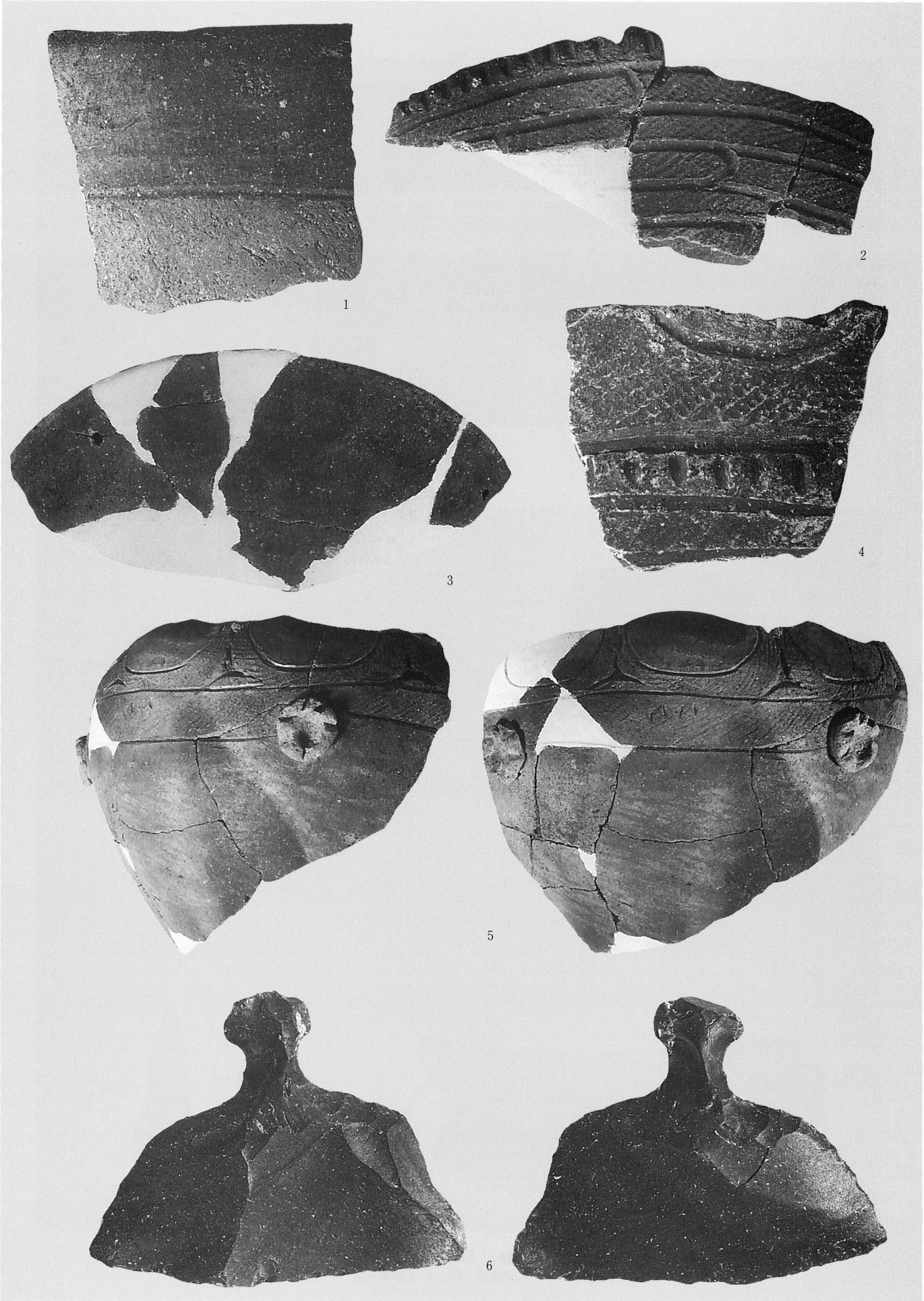


写真42　A-3試掘区Ｖｃ層出土遺物
（1・2・4・5.縄文土器・深鉢、3.同浅鉢、6.石匙）

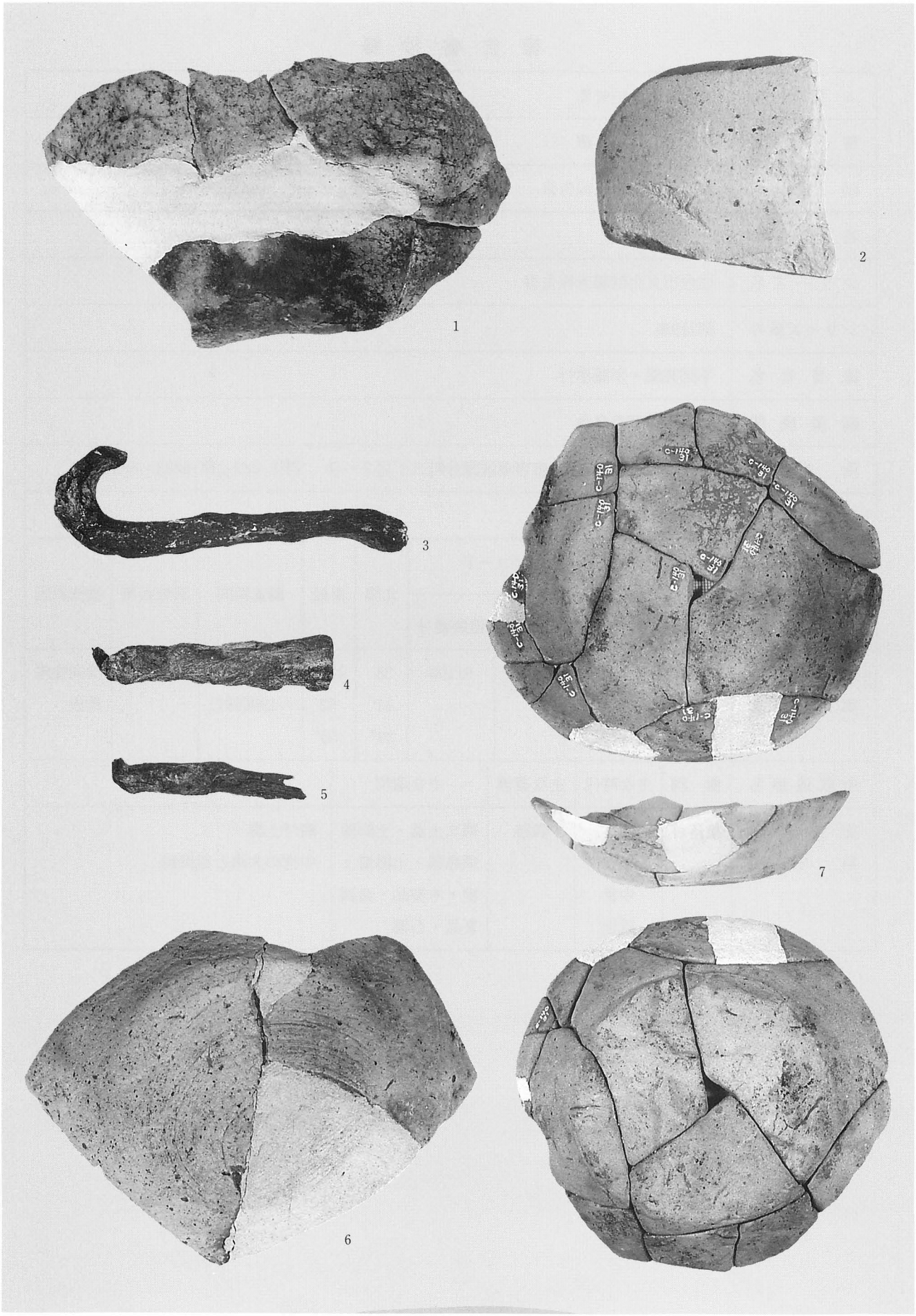


写真43　その他の出土遺物

（1.土師器・甕、2.砥石、3.用途不明鉄製品、4・5.同釘、6.土師器・坏、7.土師質土器・小皿）

報告書抄録

ふりがな	あんきゅういせき
書名	安久遺跡
副書名	第3次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第219集
編著者名	平間亮輔・伊藤孝行
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-71 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7－1　TEL 022-214-8893～8894
発行年月日	1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
あんきゅういせき 安久遺跡 第3次	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 たいはくくにしなかだ 太白区西中田 五丁目7－8	04100	01106	38° 11′ 39″	140° 52′ 56″	19960722 ～19960911	707m²	共同住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
安久遺跡 第3次	集落跡	縄文 平安 中世 近世	溝跡	縄文土器・土師器 須恵器・土師質土器・木製品・金属製品・石器	瘤付土器 中世の大溝と橋脚跡

仙台市文化財調査報告書第219集

安久（あんきゅう）遺跡

――第３次発掘調査報告書――

1997年３月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目７－１
022(214)8893～8894

印刷　株式会社　東北プリント
仙台市青葉区立町24－24
TEL 263-1166